

《公開シンポジウム 2025-2 (月例サロン通算 350 回) 報告》

賀川浩さんを語ろう！

次世代につなげるために

名 称 : NPO サロン 2002 公開シンポジウム 2025-2

賀川浩さんを語ろう！一次世代につなげるために

主 催 : 特定非営利活動法人サロン 2002

協 力 : 神戸市立中央図書館（神戸賀川サッカー文庫）、神戸フットボールクラブ、

日本サッカー史研究会

日 時 : 2025（令和 7）年 12 月 21 日（日）14:00～17:00（終了後は同会場で懇親会～19 時）

会 場 : 筑波大学附属高校「桐陰会館」&オンライン（Zoom）

登壇者 : 賀川浩さんと関わりの深いライター、協会関係者など

長岡 康規：元神戸高校サッカーチーム部長 稲垣 康介：朝日新聞編集委員

田村 修一：フットボーラーアナリスト 大澤 謙一郎：サンケイスポーツ文化部長

松永 憲明：元神戸市立図書館職員 出島 剛：共同通信社

※中塚 義実：NPO 法人サロン 2002 理事長 ※コーディネーター

※本多 克己：株式会社シックス／NPO 法人サロン 2002 副理事長

参 加 費 : 1,000 円（サロン 2002 ファミリーと学生は無料です）

参加申込 : Peatix よりお申し込みください ⇒ <https://peatix.com/event/4660414/>

報告書作成 : 中塚義実

<目次>

◆オープニング 14:00～14:40

- ・賀川浩さんの紹介（映像）
- ・「賀川さんのあゆみ」 中塚 義実
- ・「賀川さんを偲んで」 本多 克己

④大澤 謙一郎：サンケイスポーツ文化部長

⑤松永 憲明：元神戸市立図書館職員

⑥出島 剛：共同通信社

◆賀川浩さんを語ろう！ 14:40～17:00

- ①長岡 康規：元神戸高校サッカーチーム部長
- ②稻垣 康介：朝日新聞編集委員
- ③田村 修一：フットボーラーアナリスト

◆クロージング 17:00～17:10

- ・賀川浩さんのことば（映像）

◆懇親会 17:15～19:00

＜開催趣旨＞

2024 年 12 月 5 日、賀川浩さんが 100 歳の誕生日を前に天寿を全うされました。1 周忌のタイミングで、賀川さんが所属された最後の団体として標記シンポジウムを開催します。

1924 年 12 月 29 日に神戸市で生まれた賀川さんは、兄・太郎の影響もあって早くからサッカーに触れてきました。神戸一中（現兵庫県立神戸高校）の戦前の黄金期をマネージャー、プレーヤーとして過ごす中で、サッカーに対する深い愛情と独特的な視点が育まれます。しかし日本は戦争の時代に突入。10 代後半の賀川さんも徴兵され、陸軍特別操縦見習士官として、最後は特別攻撃隊員として朝鮮半島で訓練を続けます。終戦がもう少し遅かったら、私たちは賀川さんの文章に触れることができなかつたかもしれません。

思い起こせば中学・高校生の頃、「サッカーマガジン」でワールドカップごとに連載されていた賀川さんの「ワールドカップの旅」は、世界のさまざまな国や地域でサッカーが文化として根付いていた様子を知る貴重な情報でした。また「連続写真でみる世界のサッカー」では、賀川さんの解説を通してトップレベルの選手の技術・戦術を知ることができました。大人になって賀川さんにお会いし、日本サッカーのあゆみや思いを直接お聞きすることができたのはこの上ない喜びでした。長年にわたるジャーナリストとしての功績により、2010 年には日本サッカーダンジョンに掲額され、2015 年には日本人で初めて FIFA 会長賞を受賞されました。

最期まで温かく日本サッカーを見守り、私たちに多くのことを伝えてくださった賀川さんことを語り、次世代につなげていきたいと思います。（中塚義実）

公開シンポジウム 2025-2 参加者 計 45 名(敬称略)

【会場での対面参加】(26名)

阿部博一（日本サッカー史研究会）、稻垣康介（朝日新聞編集委員）、○大河原誠二（桐窓サッカ俱楽部、サッカークラブ桐一族、筑波大学附属高校蹴球部106回卒）、大澤謙一郎（サンケイスポーツ文化部長）、川島健司（読売新聞東京本社）、香取勇希（筑波大学附属高校蹴球部131回卒）、黒田勇（関西大学）、小堀俊一（日本サッカー史研究会）、小堀徹（大阪商業大学）、○小松俊介（筑波大学附属高校）、済木崇、定成章弘（神戸高校サッカーチームOB）、鈴木光次郎（神戸高校卒業）、○田中俊也（三日市整形外科）、田村修一（フットボール・アナリスト）、出島剛（共同通信社）、長岡康規（元神戸高校サッカーチーム部長）、○中塚義実（NPO法人サロン2002理事長）、○野田直広（富士電機）、○本多克己（株シックス／NPO法人サロン2002副理事長）、松永憲明（元神戸市立図書館職員）、宮川佳己（日本工学院専門学校）、武藤文雄（サッカー講師、日本サッカーワークショップ）、ベガルタ仙台サポーター）、村上雅之（神戸高校・神戸大学サッカーチームOB）、山内博之（日本サッカー史研究会）、大和伸行（日本サッカー史研究会）

【オンライン参加】(19名)

◆神戸賀川サッカー文庫（神戸市立中央図書館内）から参加 (7名)

- ・神戸賀川サッカー文庫：北川信行、近藤博明、砂田(岩谷)純二、長木義明、前田和夫
- ・神戸市立中央図書館：榎井里香、松尾宗一郎

◆それぞれの居場所から参加 (12名)

岡田浩一（株式会社教育テック総研）、木ノ原句望（スポーツジャーナリスト）、○小池正通（エスペランサ）、貞永晃二（サッカーライター）、城村“KUMA”勉、○鈴木崇正（NECビジネスインテリジェンス）、○高平豊明（サッカー文化フォーラム）、○長野いつき（音楽家）、○嶋崎雅規（国際武道大学）、○橋和徳（富山中部高校）、内富敬（神戸大学サッカーチームOB）、○吉原尊男（フリー）
注）名前の前の記号は、○NPO法人サロン2002会員、○会員外のサロンファミリー、無印はサロンファミリー外

I. オープニング

中塚：14時になりました。「定刻主義」で参りたいと思います。

ようこそお越しくださいました。ここ、筑波大学附属高校の桐陰会館にはおよそ20名、そしてオンラインでも10名ほどの方が「賀川浩さんを語ろう！」ということで、語りに来てくださいました。單なる思い出話というだけでなく、「次世代につなげるために」というサブタイトルを付けて企画いたしました。主催団体である特定非営利活動法人サロン 2002 理事長の中塚義実です。3月末までこの高校で教員をしていましたが、38年間の勤務を終えて退職し、いまは週5日ほどの自由時間を謳歌し、こんなことばかりやっています。

進行役はもう一人、コーディネーター2名態勢です。皆さんおなじみの本多克己さんです。

本多：皆さんこんにちは。サロン 2002 の副理事長で、賀川浩さんのカバン持ちでした本多です。ずっとサッカーを語ってきた賀川さんについて、今日は賀川さんことを語ろうということで、賀川さんは「わしが語るんやなくて、わしのことを語られるんかいな！？」とおっしゃっていると思いますが、しっかり賀川さんにも声を届けていきたいと思います。よろしくお願ひします。

<賀川さん紹介映像>

中塚：映像の中で賀川さんが持っておられたFIFA会長賞が神戸からこちらに届き、いま皆さんの前にあります。のちほど近くでご覧ください。

今日の進行です。はじめに私から「賀川さんのあゆみ」を年表に沿ってご紹介させていただきます。次に「賀川さんを偲んで」ということで本多さんから。

主催者側から賀川さんを語ったあと、参加者側から順にお話をいただきます。オンライン参加も含め、皆さんにいっぱい語ってもらいたいのですが、そうしていると100年ぐらいかかりそうなので、6名の方にあらかじめお願ひしてあります。そしてクロージング。終了後はこちらの会場で、ささやかな懇親会を開き、引き続き賀川さんを語り合いたいと思います。

参加者の紹介はその都度させていただきます。では中身に入っていきます。

1. 中塚義実—賀川浩さんのあゆみ

◆年表からみる賀川浩さんのあゆみ

会場の皆さんには、昨年度の公開シンポジウム報告書をお配りしました。オンラインでご参加の方も、こちらからみることができます。

毎年作成しているNPO サロン 2002 の公開シンポジウム報告書の昨年度版です。去年の12月5日に賀川浩さんが亡くなられたので、昨年度の報告書に「追悼 賀川浩」というページを設けました。FIFA会長賞を受

◆オープニング 14:00~14:30

- ・賀川浩さんの紹介(映像)
- ・「賀川さんのあゆみ」 中塚 義実
- ・「賀川さんを偲んで」 本多 克己

◆賀川浩さんを語ろう！ 14:30~16:40

- ①長岡 康規：元神戸高校サッカーチーム部長
- ②稻垣 康介：朝日新聞編集委員
- ③田村 修一：フットボールアナリスト
- ④大澤 謙一郎：サンケイスポーツ文化部長
- ⑤松永 憲明：元神戸市立図書館職員
- ⑥出嶋 剛：共同通信社
- ⑦(会場・オンラインで)参加された皆さまより

◆クロージング 16:40~16:45

- ・賀川浩さんのことば(映像)

◆懇親会 17:00~19:00



賞された時にまとめられたパンフレットをそのまま転載したものです。そこにある年表から、賀川さんのあゆみをざっと押さえておきたいと思います。

https://www.salon2002.net/src/pdf/symposium/2025_sympo-2_kagawa.pdf

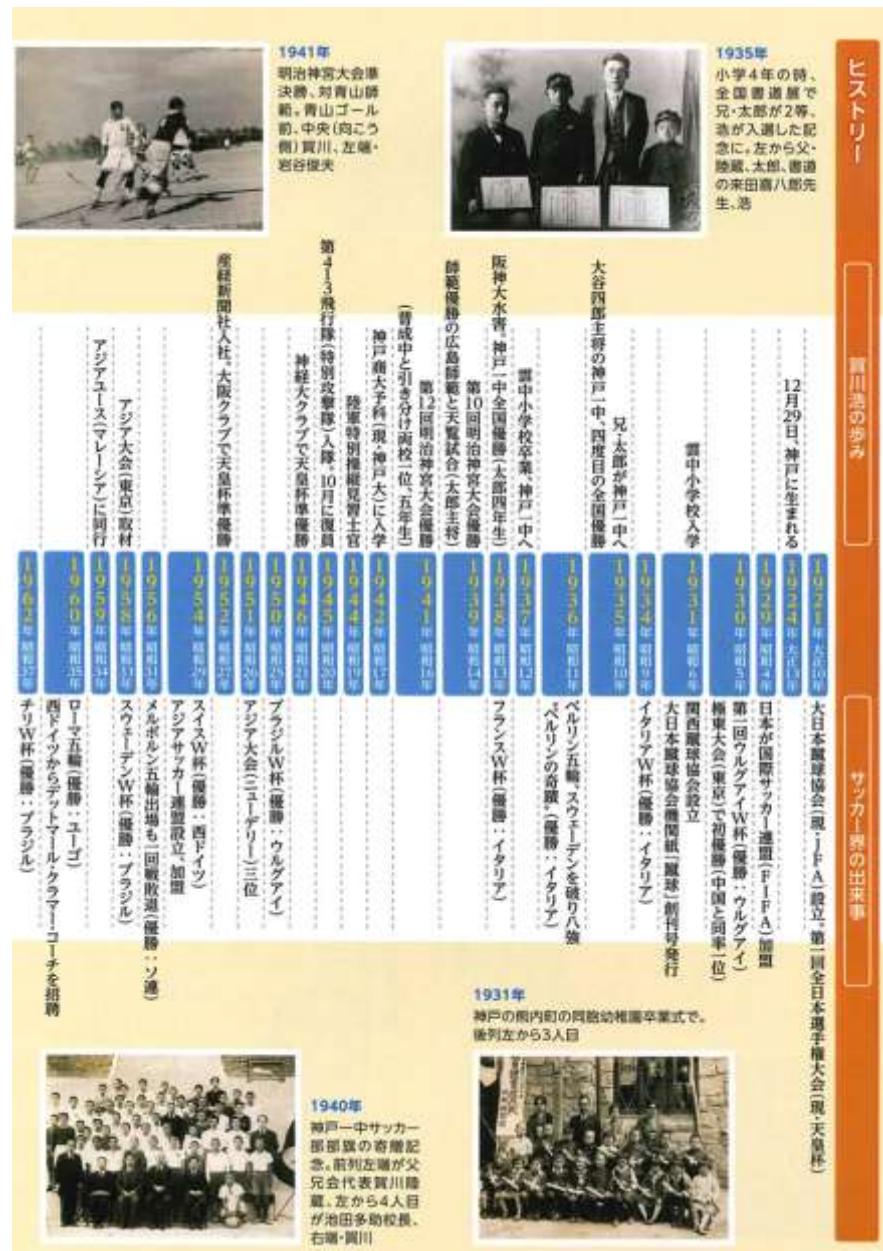
1924年に神戸でお生まれになりました。この前年に関東大震災があり、賀川さんが生まれた年に甲子園球場ができる、そんな時代です。雲中小学校入学とあります。賀川さんからお聞きしましたが、当時としては珍しくサッカーをやっていた小学校です。

2歳年上のお兄さん、賀川太郎さんが神戸一中へ入学します。大谷四郎主将の名前もよく出てきます。神戸一中は全国レベルの強豪でした。日本代表選手を数多く輩出される学校に1937年に入学されます。お兄さんもサッカーチームで活躍していましたし、高等師範の主将だった河本春男さんが神戸一中に赴任され、賀川さんのお隣に下宿されていました。後にユーハイムの社長をされる方ですね。こうしたご縁もあってサッカーの道に進んでいかれます。

但し最初はプレーヤーというよりもマネージャーをされており、途中からプレーヤーとなつたと聞いております。5年生の時は明治神宮大会で、朝鮮半島から出場していた普成中と引き分けで両校優勝。朝鮮半島の代表チームも戦前、日本の大会に出て多くのタイトルを取っていたのですが、そこと互角に渡り合っていたのが神戸一中だったということです。

しかし、少しずつ戦争の足跡が忍び寄ってきます。1942年には神戸商科大学の予科に入学されますが、1944年には徴兵され、陸軍特別操縦見習士官となります。飛行機に乗っておられたのですが、最後は特攻隊の準備をされていたところで終戦を迎えます。

この頃のことでも賀川さんは語ってこられました。その中の一つのエピソードを皆さんと共有しておきたいと思います。



陸軍の航空隊です。若者がちゃんと飛行機に乗れるようにするために、昔風の練習で怒鳴ったり叱ったり。「飛行機乗りでもなんでもぼかぼか殴りますけど、技術を上達するためにはほめるのが一番いいということが自分でもわかりました」とのこと。上官の中にも殴ったり蹴ったりする人もいれば、そうじやなくてちゃんと理論的に指導してくれる人もいる。賀川さんは「何とも言えん教え方のうまさに驚嘆をしました」という上官に巡り合います。「黙ってて、大きな声でも怒鳴りませんし、何もしないんですけども、ダメなときはダメ、それはもう本当に

感心しました」「つまらんこ」と言っているよりも、やっぱり技術を大事にして教える方がずっと効果がある」ということがわかり、「これは帰つてからの、サッカーの指導にもものすごくプラスになった」と語っておられました、記事としても残っていますので、ご確認いただければと思います。

賀川さんがサッカーに目覚めた頃、世界のサッカーでは1930年にFIFAワールドカップがはじまり、極東選手権で日本代表が初優勝を果たします。1936年のベルリンオリンピックの日本代表には神戸一中の卒業生も多くいます。しかし戦争ですべてが途絶え、復員された賀川さんもこの先どうしようかと悩んでおられたようでした。ご縁があって産経新聞社に入社したのは1953年でした。

日本サッカーは戦後低迷しますが、神戸では底辺からのいろんな動きがあり、そこに賀川さんも深く関わります。

1963年兵庫サッカー友の会の設立。1965年神戸少年サッカースクール設立。1970年、日本初の法人格

昔風の練習で怒鳴ったり叱ったりすることが多く、陸軍でももちろん飛行機乗りでもなんでもほかほか殴りますけど、やっぱり技術を上達するためにはほめるのが一番いいということが自分でもわかりました。

自分が飛行機の技術を自分で「今日はものにしたな」と思ったのは、昭和19年の秋に一緒に乗ってくれた将校が、すごい年期の入った将校でその人と一緒に乗って編隊のコツを黙って教えてくれるんですけど、そのときのあうんの呼吸の指導の仕方というのがね、僕自身はもうそのころ、学生のときでも後輩にサッカーを教えたりしていますから、その何とも言えん教え方の上手さに驚嘆をしました。

黙って、大きな声でも怒鳴りませんし、何もしないんですけども、ダメなときはダメ、それはもう本当に感心しました。陸軍では、ちょっとそのへんの物を積むのに「この端がちゃんと合っていない」というだけで人をひっぱたくところがあったんですけどね、そういうつまらんことを言っているよりも、やっぱり技術を大事にして教える方がずっと効果があるということはやっぱりわかりました。これは帰ってからの、サッカーの指導にもものすごくプラスになったと思います。

2015-3 FIFA会長賞受賞記念講演「マイフルボールクロニクル1924~2015」
https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2015/2015-3.pdf



を持つサッカークラブ、神戸フットボールクラブ創設です。神戸がいろんな意味で日本のサッカーをリードしていた時期なんだろうと思います。産経新聞の記者からサンケイスポーツの編集局長になられる時期に、このような社会活動も為されていたということです。

そして1974年、初めてワールドカップの現地取材をされるわけです。

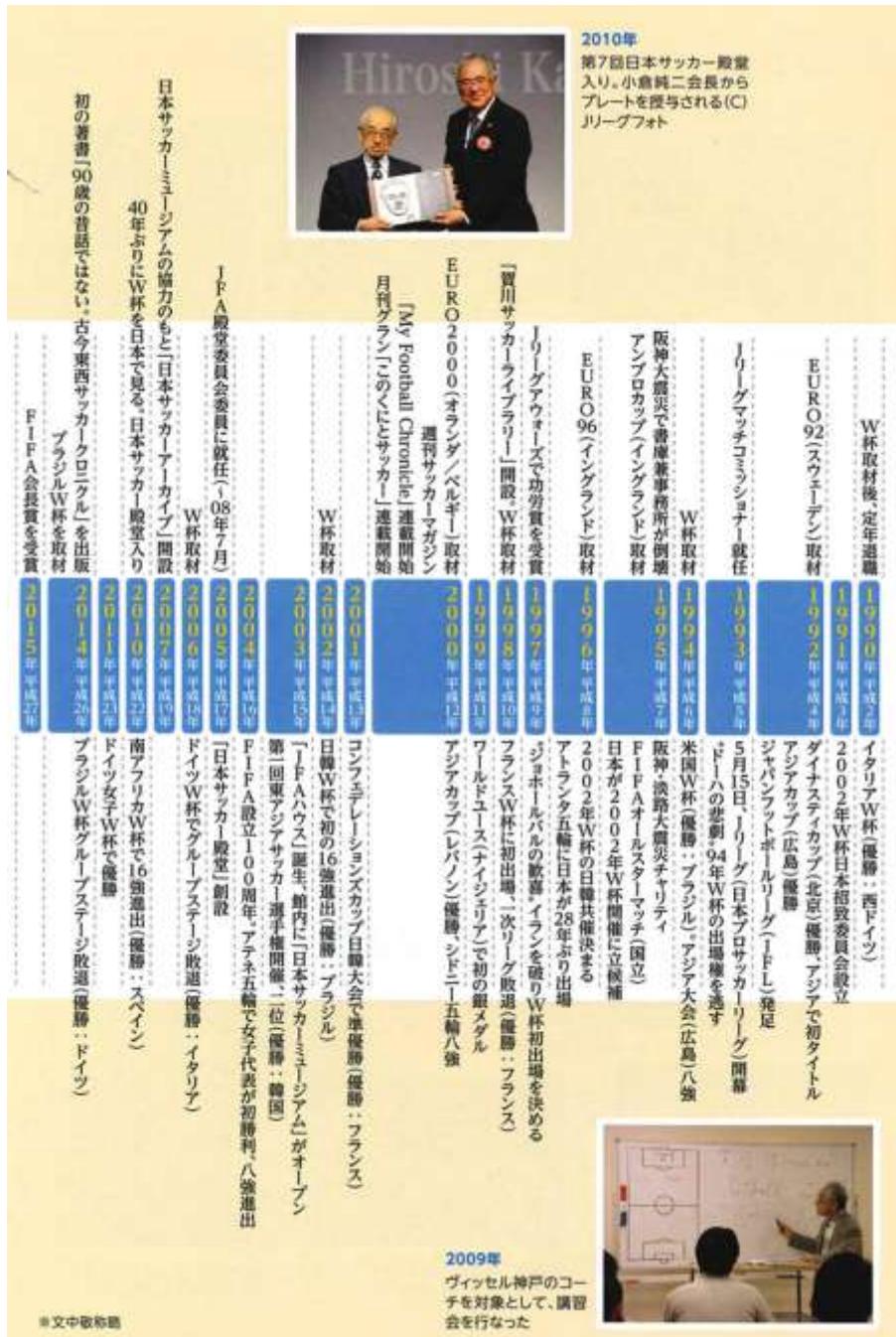
私は中学1年生でした。先日、大阪の実家に帰ったとき、1974年に最初に買ったサッカーマガジンがあり、今日何冊か持ってきてました。我々は賀川さんや牛木素吉郎さん、中条一雄さんらの記事を通して、あるいはダイヤモンドサッカーの岡野俊一郎さんの解説を通して、サッカーの文化的な広さや深さを学んでいたのだということをすごく感じております。

その後、日本のサッカーが少しずつ進化していく節目で、賀川さんの記事やさまざまな活動が年表に記されています。1990年のイタリア大会取材後に賀川さんは定年退職されます。そこから先が日本のプロサッカーの時代になっていくわけです。おそらくジャーナリストの大先輩として、あるいはサッカー協会を担っている人たちのご意見番としても、賀川さんは大きく貢献されたと思います。

1995年の阪神淡路大震災

で、神戸は大変なことになってしまいます。賀川さんのご自宅の資料も取り出せなくなってしまします。ちょうどその頃、インターネットというメディアが出てきて、そこに記事を書いていくことを始められます。本多さんとのつながりがこのころ始まったのではないかと思います。

2005年に日本サッカー殿堂が創設され、賀川浩さんは2008年まで殿堂委員を務められます。賀川さんご自身も2010年に殿堂入り。そして2015年にはFIFA会長賞を受賞ということになります。賀川さんのお兄さんの太郎さんも殿堂入りされています。兄弟でのサッカー殿堂入りは唯一ですね。



◆賀川浩さんとサロン 2002

ここからは賀川さんとサロン 2002 の関わりについてです。毎年やっている公開シンポジウムに、賀川さんに初めてご登壇いただいたのは 2002 年、神戸での「ワールドカップ総括シンポジウム—観戦と交流の物語を中心に」でした。2005 年にはドイツからクラマーさんが来日されるタイミングで「クラマーさんありがとう！」を開き、賀川さんに基調講演をお願いしました。「高校サッカー90年誌」「スポーツクラブの法人化」「日本サッカーのルーツ」のいずれにおいても賀川さんにご登壇いただき、いろいろ学ばせてもらいました。最後に登壇されたのは 2021 年 12 月の「JFA100周年：2021年の総括と展望」で、オンラインでの開催でした。

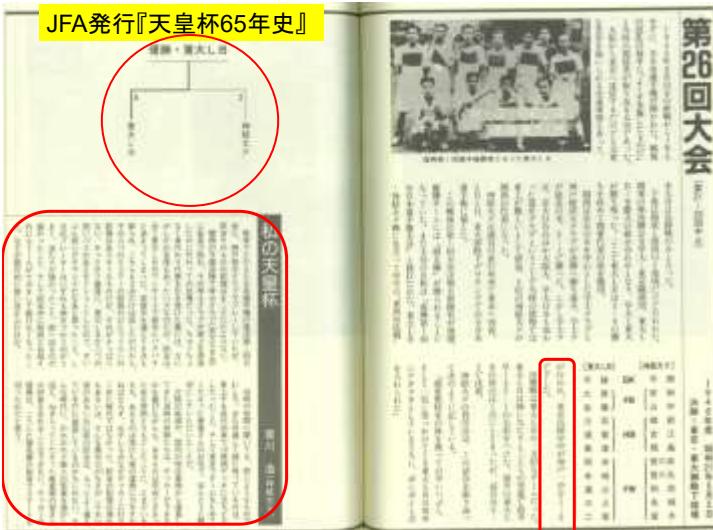
おまけですが、戦後すぐに復活した全日本選手権、いまの天皇杯に賀川さんは選手として出場されています。東大 LB と神戸経済大学の試合です。『天皇杯 65 年史』の第 26 回大会のところに、賀川さんが「私の天皇杯」の文章を寄稿されています。その試合の前座で旧制中学の東西チャンピオンの試合があり、東京高師附属中と神戸一中が対戦しています。高師附中が 1-0 で全国優勝しますが、いつかのシンポジウムでその話になり、賀川さんが試合会場に着いたとき、「後輩たちが試合に負けてしょんぼりしているところやった」とおっしゃっていました。このときの高師附中を率いていたのが、学生監督だった小栗純二さんで、この方ともサロンのシンポジウム会場でご対面されています。貴重な写真です。

賀川さんには月例サロンでも何度か話を聞いていただきました。2015 年 3 月は、墨田区のアリーナで U-18 フットサルの選抜大会決勝戦が終わってからで行われました。この大会の得点王には「賀川浩賞」が授与されます。いまでも NPO 法人サロン 2002 が主催する U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップでは「賀川浩賞」を得点王に渡しています。

賀川浩さんとサロン 2002

◆公開シンポジウム

- ・2002年8月10日 神戸ファッション美術館
ワールドカップ総括シンポジウムⅡ—「観戦と交流の物語」を中心
賀川浩、**スー木下**、**橋本潤子**、**宇都宮徹一**
- ・2005年11月12日 味の素スタジアム会議室
クラマーさんありがとう D.クラマー、**賀川浩**、**両角晶仁**、**大橋二郎**、**中塙義実**
- ・2012年3月4日 味の素スタジアム
「高校サッカー90年誌」を語ろう 北原由、牛木素吉郎、**賀川浩**、**中塙義実**
- ・2014年3月30日 筑波大学東京キャンパス
スポーツクラブの法人化を語ろう **賀川浩**、**黒崎祐一**、水上博司、**中塙義実**
- ・2016年12月17日 筑波大学附属高校桐陰会館
日本サッカーのルーツを語ろう—東京高等師範学校の足跡を中心に
真田久、**賀川浩**、牛木素吉郎、**中塙義実**
- ・2021年12月11日 オンライン(ZOOM)
JFA100周年：2021年の総括と展望—TOKYO2020、WEリーグ、そしてコロナ後へ
賀川浩、**加藤寛**、**川島健司**、**中塙義実**



小栗純二さん（左）と賀川浩さん（右）
サロン2002公開シンポジウム
「スポーツクラブの法人化」を語ろう！
2014年3月30日 筑波大学東京キャンパス

2015年3月のお題は「マイ・フットボール・クロニクル 1924-2015」でした。FIFA会長賞を受賞された記念に、東京と神戸で話をされたものです。神戸では賀川サッカー文庫で話されました。報告書をご参照ください。https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2015/2015-3.pdf

賀川さんが最初に月例会に参加されたのは、1998年5月の会で、筑波大学附属高校会議室に来られました。宇都宮徹壱さんの著書紹介『幻のサッカー王国—スタジアムからみた解体国家ユーゴスラビア』で、「こんな話を聞きにくる人がおるんやな」と賀川さんが本多さんに語っておられたそうです。このときが第14回月例会。そして本日、月例サロンは通算350回を迎えます。

賀川さんが参加された最後の会は、2023年8月の公開シンポジウム「成田十次郎先生を語ろう！」でした。神戸からオンラインで参加された賀川さんは、シンポジウムの感想として「わしらが記者やクラブのメンバーで考えていたことを大学や学校で考えておられたんやなあ。そら成田先生は殿堂に入つてもらわなあかんわ」という言葉を残されました。

最後のスライドです。確か2010年のサッカーダンス入りのときだったと思います。サロン2002から賀川さんにリュックサックをプレゼントさせていただきました。2014年はこれを背負ってぜひブラジルへという願いを込めたものです。

そして賀川さんはFIFAワールドカップ・ブラジルに行かれました。最後のワールドカップです。

リュックサックは2代目もあるのですが、その後のワールドカップの旅はかないませんでした。けどどこへ行くにも、サロンのリュックサックを愛用されていたそうです。

来年のワールドカップも楽しみですね。3カ国の共催だとどんな旅になるんでしょう…。

こんなところで私から、賀川さんのあゆみと、サロン2002会員としての賀川さんの紹介をさせていただきました。

賀川浩さんとサロン2002

◆月例会・月例サロン

・2011年1月27日 筑波大学附属高校
戦前のサッカー育成—神戸一中を中心

・2014年8月30日 フットボールサロン4-4-2
現役最年長記者 賀川浩さんが語る
—2014年FIFAワールドカップ・ブラジルとU-18フットサル

・2015年3月25日 フットボールサロン4-4-2
FIFA会長賞受賞記念講演会
「マイ・フットボール・クロニクル1924-2015」

・2016年2月1日 フットボールサロン4-4-2
「このくにのサッカー」を語る

サロン2002からのプレゼントはリュックサック 2014年 ブラジルへ



2. 本多克己—賀川さんを偲んで

では、いくつかのエピソードで賀川さんのお話をさせていただきたいと思います。

◆世界

まず「世界」ということで、やはり賀川さんは「ワールドカップの旅」という連載に代表されるように、ずっと世界に目を向けてこられたライターだったと思います。



これは 90 年のイタリアワールドカップ取材の時です。ミラノの中央駅からトリノに向かう列車に乗り込むところで、賀川さんの嬉しそうな表情が見られます。

これは最後のワールドカップ取材となったブラジルで、レシフェのホテルの裏にプライベートビーチがあつて、朝ご飯食べた後に、プライベートビーチでゆっくりしておられる時の写真です。杖で向こうを指しながら、「この海の向こうはアフリカやな。アフリカのどの辺やろな。西海岸やからナイジェリアのあたりかいな」みたいな話をしていたことを覚えてます。

賀川さんはどこへ行くにしてもそういうふうに、いま自分がいる所はどんなところなのかということをいつもお話されていました。僕にとってはこういう光景はすごくなじみのあるすがたです。

FIFA 会長賞の授賞式の後、飛行機から下を見下ろしてヨーロッパを飛びながら、あの山はどこの山かいとか、あの川が何ていう川でっていう話をいつもしながら、空から下を眺めるのをすごい楽しみにされておられました。

賀川さんが世界に対してこのように目を向けるというのは、サッカーのことがあるからだと最初のうちは思ってたんですけど、実はそうではないというのが、後になって知ることになりました。

『次の本へ』という本があります。これは『この国のサッカー』という賀川さんの対談集を出してくださった苦楽堂という出版社が、『この国のサッカー』の前に原稿依頼をしてくださった本です。

どういう本かというと、自分が一冊の本を読み、それをきっかけにして次の本を読むことになるというエピソードを語ってくださいという本です。その中で賀川さんは、「そして私は世界を見に行くようになった」というタイトルでこんなことを書かれています。戦争が終わって 1945 年に日本に帰ってきて、H.G.ウェルズの『世界史概観』という本を読んだと。そこで改めて、世界史について大変興味を持ったということです。次に読んだのがヴィダル・F・ラブラー・シュ教授が書かれた『人文地理学原理』という本です。これを読んで、世界史と世界の地理について非常に興味を持つようになったということが書かれています。サッカー以前に、まず世界史、世界地理について深く興味を持つようになったきっかけとなりました。

◆笑い

次は「笑い」です。バロンドール授賞式のスピーチ原稿を書きながら、「とりあえず関西人が行くんやから笑いを一つ取らないかんな」と言いながら原稿を作っていました。日本語で書いた手書きの文章をこちらでメールに入れて、イギリンドサッカーのコメンテーターとして活躍しているベン・メイブリーが英語に翻訳してくれて、それを持ってスイスに向かいました。



会場では、ちょうど前年度にバロンドールを受賞された澤穂希さんやブラジルのマルタがいます。デルピエロは授賞式の後にわざわざ挨拶に来てくれました。ワンバックもいます。FIFA会長プラッターさんのお部屋でお二人で話をする機会もありました。

そのスピーチは、メッシやノイマーも笑わせた、関西人らしいすばらしいスピーチだったと思います。

あと、「決勝トーナメントはない」という話です。いまは日本サッカー協会として「決勝トーナメントは使いません」ということがしっかりと表明されていますけど、ワールドカップが回を重ねるごとに、逆に「決勝トーナメント」という言葉が定着してしまっています。ただ、こういうことに対して「この表現はおかしいぞ」と、普通であれば批判になったり攻撃になったりするところを、賀川さんはユーモアを交えながらいつも語っていました。

トーナメント、英語で言うとノックアウトですね。「日本語ではトーナメントなんです」といまは言われているわけなんんですけど、「日本語と言うんやったら決勝Tやなくて決勝トって書かなあかんわな」と言うのは賀川さんらしいところでした。

**トーナメントは
日本語やと
言うんやったら**

⇒

**決勝T やなくて
決勝トって
書かないかんわな**

まあ、こういうふうな形で、賀川さんの記事は選手やチームに対する批判的なことではなく、温かい言葉で書かれてましたけど、それは常に関西人らしい、賀川さんらしいユーモアが詰まっていたなと思います。

◆仲間

次は「仲間」です。賀川さんと一緒に試合を見ていると、「この試合のことを大谷四郎やったらどういうんかな」とか、「岩谷俊夫やったらこう言うたな」ということをよくお話ししていました。

右側の写真が賀川さんと岩谷さん。左側の写真の前列右端が大谷四郎さんです。中段でしゃがんでいるのが賀川さんですね。一緒にボールを蹴った仲間をずっと大切にしてこられました、大谷さんは朝日で、岩谷さんは毎日で、記者としても当時のサッカーのトップレベルの日本代表クラスの選手が記者になって活躍されました。賀川さんにとっては本当にかけがえのない仲間であったと思います。



先日お亡くなりになった釜本邦茂さん。賀川さんにとっては常に、選手の判断の基準として、頂点に釜本さんがいました。日本でいろんな選手が出てきました。三浦カズが出て、中田ヒデが出てきました。ストライカーとなると、高木琢也や平山相太とかが出てくる度に、いろんな方から「釜本さんと比べてどうですか」という話をされるんですが、その度に賀川さんの言葉は決まっていて、「そんなもん釜本と比べたらかわいそうやないか」という話をずっとされていました。

川淵三郎さんです。川淵さんと賀川さんがお会いになると、いつも同じ話から始まります。僕の結婚式翌日のゴールを書いてくれた賀川さんの記事の切り抜きはいまでも大切にしているというお話です。賀川さんの前では川淵さんも一選手だったんだなと思わされました。

次は岡田武史さんです。賀川さんもこの写真、本当に満面の笑みというか、非常に嬉しそうな表情で写ってらっしゃいます。賀川さんにとっては、高校生の岡田さんがドイツに行きたいと相談に来た時、「あんた早いからもうちょっと日本で頑張れ」ということで、いまの岡田さんがあるというお話がいろんなところで語られていいです。

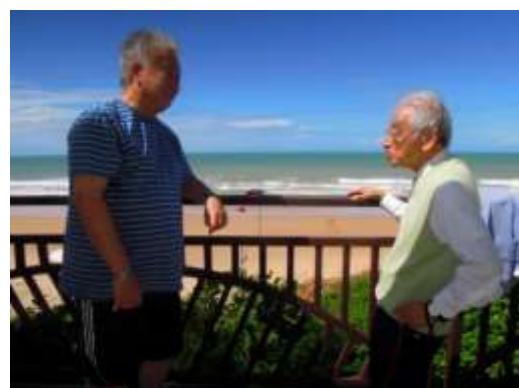
先日岡田さんから、日本代表監督で日本中から叩かれた時に「あんたしかおらんから頑張れ」と賀川さんから励まされたという話ををしていただきました。誰に対してもそういう励ましの言葉をかけてこられたのが賀川さんかなと思います。

次は澤穂希さんです。澤さんはINAC神戸にいた時に、わざわざ賀川さんのご自宅まで近賀選手と二人で来てくれました。いろんな話をして、その後、試合を見に行ったり練習を見に行ったりするようになりました。バロンドールの受賞式でも一緒になりました。

澤さんにとっても、これだけ年齢も違う二人ですけど、自分のプレーに対して賀川さんがコメントするのを本当に真摯に聞いておられました。世代とかは関係なく、賀川さんの夢というものが選手に響いたなという印象でした。

セルジオ越後さんです。2014年のブラジルワールドカップですね。これはもう全てセルジオさんのアテンドで、ブラジルの取材を行うことができました。先ほども見ていただいたレシフェのホテルですね。ラジオか何かの取材を二人で受けていて、その後に二人で撮った写真です。

ブラジルに行ってみると、この時も最年長は賀川だということになっていて、自分が取材しに行ってるんですけど



ど、周りの方からたくさん取材されるということも多くなっていました。

これは、プレスセンターでFIFAの取材を受けていた賀川さんです。横にいるのが木ノ原旬望さんです。英語の通訳をここでしていただいてこの取材が成り立ったのですが、今日はオンラインで木ノ原さんがお入りいただいている。よろしかったらこのときの様子をコメントいただけないでしょうか。

木ノ原：はい、ご紹介に預かりました木ノ原です。記者として賀川さんと長年、現場で一緒にさせていただいてきた一人です。これは大変懐かしい写真です。2014年W杯ブラジル大会の時に今、お話をあったFIFA公式サイトのFIFA.comの取材が入ったので通訳として取材の手伝いをしてくれと、FIFAとの間に立った日本協会の方から現地で頼まれて、お引き受けしたという流れでした。



写真の場所は、日本が大会初戦を戦ったレシフェの試合会場に設置されたメディアセンターと呼ばれる、我々記者が作業をするワーキングルームです。その日は日本の試合が22時キックオフだったんですけど、その数時間前に別会場のマナウスでイングランドとイタリアの試合がありました。それをメディアセンターのモニターで見たいということで、多くの記者が結構早めにレシフェの会場入りしていて、私も賀川さんも、その一人でした。そこで、試合前の待ち時間の間に取材したいとFIFAの担当者が来て、この取材になりました。

ところが、その取材で一番面食らったのは、多分、FIFAの担当者だったと思います。

というのも、イングランド戦が始まるのが18時。賀川さんも私もFIFAの担当者もその試合を見たいから、「その開始時間までに取材を終わらせようね」という話で、取材時間も大体30~40分とか、かかるても1時間はいかないぐらいだとFIFAの担当者も考えていたと思います。実際にそういう話をしていました。

ところがいざ始まってみると、賀川さんの記憶力の素晴らしさは皆さんもよくご存じかと思いますが、この時もすごく鮮明にいろいろなことをよく覚えていらして、質問は多岐にわたっていましたが、どの質問にも次から次へポンポンと反応を返される。「ああ、あの時はこうだったから…」と。しかも、説明がどれも的確で細かい、という調子だったので、途中からFIFAの担当者が賀川さんの熱い語り口に気圧されるような感じになっていました。通訳が入ったこともあって、結局、取材時間は当初の予定を大幅に超過して1時間半から2時間弱ぐらいかかった記憶があります。

時間がかかったのには別の側面もありました。メディアセンターには各国の記者が出入りしているのですが、取材を受けている間にも次から次へといろんな人が来て、「賀川さんですよね」「一緒に写真をお願いできませんか」とか「挨拶させてください」とか…。それは普段あまりない展開で、皆さんに「後にしてください」とお願いするんですけど、とにかく頻繁に中断されましたね。

そういう難しい展開でしたが、FIFAの担当者はとても良い記事にしてました。賀川さんの戦時の経験や特攻隊に行った話、どういう記事を最初に記者として書いたのか、最初に取材したワールドカップの記憶とか、そういうこともしっかり盛り込んだ記事になっていました。

取材中に当初の予定時間がオーバーして、結局、我々みんなが見たいと言っていたイングランド戦が始まってしまった。その中でも取材は続いてたんですけど、ある瞬間、メディアセンターのテレビモニターでその試合を見ていた人たちがものすごく沸いた時があったんです。イタリアに先制されたイングランドが同点にした場面だったんですが、その瞬間、賀川さんは椅子からちょっと腰を上げたようになって、「えっ、どうなったの?」という感じでモニターの方に目線を向けていました。それまでずっと取材に集中していて、その時だけ、試合に気持ちがふわっと行った瞬間だったと思います。

その場面をFIFAの担当者も印象深く捉えていたようで、記事にも「イングランド戦が気になる賀川さんに『取材のときは試合の後にしましょうか』と言われたと書いていました。記者として、やっぱり何をしていても一番気になるのは試合なのだと、現場を大切にしていた賀川さんの姿勢がうかがえる描写になっていたので、それは、記事を読んで個人的にもありがたいなと感じました。

実は、この話には後日談があって、この時の取材が元となって賀川さんのFIFA会長賞受賞につながりました。

翌2015年1月のバロンドール授賞式に賀川さんは出席されたのですが、その式典の後に取材の仕掛け人になった日本サッカー協会の担当者が賀川さんに声をかけられたそうです。「賀川さんに授賞式の後に『あんたのおかげで、ひどい目にあったわ』って言われたんですよ」という言葉ですね。そう言いながら、その人もすごく嬉しそうで、きっと賀川さんもめちゃくちゃ嬉しそうな言い回しをされたんだろうなど、話を聞いて思いました。

私にとっては、あの取材もその後の話も、どちらもすごくいい思い出です。ありがとうございました。

本多：ありがとうございます。そうですね、「あんたとセルジオのおかげでえらいことになったわ」っていういつも言ってましたね。

では画面を進めます。クラマーさんです。これはクラマーさんが中国で指導されていた時に取材に行ってクラマーさんが75歳ということでドイツサッカー協会からユニフォームをプレゼントされて撮影したものです。

クラマーさんとは歳も1歳違いということで、指導者と記者という関係だけでなく、ドイツと日本で国も違うとはいえ、同じ思いを持って日本とドイツのサッカーを強くしていきたいと思っていて、本当に同志というか、仲間という姿を見せていただいたことを覚えています。

次は、賀川さんが弟子と言ってた2人ですね。左側が神戸FC、ヴィッセル神戸等で指導された加藤寛さん。右が滝川第二、台湾にも渡られました黒田和夫さんです。お二人とも神戸FC、賀川さんが設立に関わったクラブでコーチ歴をスタートされた方で、『このくにのサッカー』で3人で対談して撮った写真です。

岡崎慎二選手のことは、黒田さんが滝川第二の先生でしたので、いつも「わしの孫弟子や」と言っています。



た。その孫弟子が賀川文庫に訪ねて来てくれた時の写真です。岡崎選手の方から賀川さんの話を聞きたいということで来てくれて、一つひとつ熱心に、本当に熱心に賀川さんの話を聞いていただいたのを覚えています。

今日は神戸からご参加いただいている神戸賀川サッカー文庫の皆さんです。本当はもっとたくさん、ボランティアの方などがいらっしゃるんですけども、お亡くなりになる本当に少し前に、神戸市長から100歳のお祝いが、100歳になる前に届いた時に賀川文庫で撮影されたものです。おそらく賀川さんが最後に賀川サッカー文庫を訪れた時の写真かと思います。

『このくにのサッカー』の前書きに書かれている言葉です。<物事には必ず「これまで」があり、先人たちが残してきたものがあるからこそ「これから」が生まれるのです。この先、日本のサッカーも再び厳しい時代を迎えるかもしれません。そのとき、「このくにのサッカー」を支えるものは、「これまで」何をしてきたか、その蓄積を知り、受け継いでいくことではないでしょうか。>

ということで、この後、賀川さんの仲間の皆さんからいろいろとコメントをいただきます。その一言一言が、賀川さんが何を伝えてきたか、何を伝えようとしてきたかということになるのだろうと思います。



日本と世界のサッカーのあゆみを眺めてきた私は、今の日本のサッカーをつくり上げることに貢献した人たちに、あらためて日本サッカーの未来を語ってほしいと考えました。

物事には必ず「これまで」があり、先人たちが残してきたものがあるからこそ「これから」が生まれるので。この先、日本のサッカーも再び厳しい時代を迎えるかもしれません。そのとき「このくにのサッカー」を支えるものは、「これまで」何をしてきたか、その蓄積を知り、受け継いでいくことではないでしょうか。

(「まえがき」より抜粋)

II. 賀川浩さんを語ろう！

本多：今日の登壇者の中で賀川さんの直接の後輩にあたる方が二人おられます。そのうちの一人が長岡康規先生です。神戸高校、旧制神戸一中の賀川さんの後輩にあたります。神戸高校サッカーチーム部長を長くお務めになり、国際審判員、兵庫県サッカー協会理事長も務められました。

僕にとっては、高校時代の隣の高校のサッカーチームの監督さんです。立派な高校のサッカーチームにはすばらしい先生がおられるなあというのが昔からの印象です。

では長岡先生、よろしくお願いします。

1. 長岡康規－神戸高校の後輩として

◆神戸一中、神戸高校の先輩たち

私は賀川さん（一中43回）の24年後輩になります。神戸高校に入学したのは1964年東京オリンピックの年です。サッカーチームでいうと、神戸一中・神戸高校サッカーチーム創部50周年を祝った翌年に入学しました。

高校時代、たくさんの先輩にお世話になりました。まずは1年生の時の高山忠雄校長（一中23回）。高山先生は一中が神戸高校になった年からずっと監督でした。私が入った時は17年目。ずっと校長だったんです。

賀川さんからみたら20年先輩で、高山先生の1年先輩が白洲次郎です。御影師範附属小学校の時から白洲さんと一緒にずっとボールを蹴っておられる。東大に進んで俊足でならした、極東オリンピックの優勝メンバーです。

2年生からは大勢の先輩にお世話になりました。サッカーを教えてくれる先生はいなかつたんですけども、休みの日にはたくさんやってこられて、試合の相手をしてもらいました。春休みや夏休みには、慶應の大仁邦彌さんや村越克己さん、早稲田の細谷一郎さんなどから直接指導をいただいたこともあります。

3年生の秋には岩谷俊夫さん（一中44回）に数回教えていただく幸運にも恵まれました。貴重な機会でした。先ほどもありましたけど、賀川さんの1年後輩にあたります。毎日新聞の記者で、メルボルン五輪出場を決めた時の日本代表キャプテンでした。東京オリ



1年生のときの監督
高山忠雄 校長



上記2枚は高山忠雄氏所蔵



ンピックの時には、長沼健さんや岡野俊一郎さんをバックアップした、今まで言う技術委員長を務められた方です。

写真みてください。「子どもを教えるのが実にうまかった」というのは、大谷四郎さんの言葉です。岩谷さんは非常に優しかったです。それから賀川さんがよく言っておられたのは、「神戸一中の卒業生で、日本のサッカーに最も貢献した人は誰か。それは、ドクター加藤正信」。よくおっしゃってました。

岩谷さんは一度、朝日新聞の大谷四郎さんを誘ってグラウンドに来られました。大谷さんは一中37回、賀川さんの6年先輩です。東京大学出身で1953年のドルトムントでの、今までいうユニアービーシアードにコーチとして行かれた方です。その時のメンバーは、皆さんご存知のこういう方々でした。

岩谷さんと大谷さんが来られた時の練習ですけれども、岩谷さんが攻撃陣を集めてゴールを使った3対2の攻防。それを見ていた大谷さんは、それに対抗して、守備陣を集めてアドバイス。次に岩谷さんが、それを受けた新たなアドバイスをして攻撃陣を盛り立てる。そういう、ワクワクするような練習もありました。

大谷さん、岩谷さん、そして賀川さん。私たちは当時から、「一中の三人のスポーツ記者」と呼んでました。

◆賀川浩さんのこと① OB会

ここからは賀川浩さんの話をさせていただきます。まずはOB会です。

私は29歳の時に、母校に社会科教師として赴任しました。先ほど賀川さんがヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの『人文地理学原理』を読んだという話がありましたけど、地理の教師として驚きました。親しくお話をすることになったのは、母校に15年間勤務している時でした。

毎年定例のOB会を5月にするんです。その前にはよく電話をしました。「賀川さん、総会の議事が済んだら20分ぐらい話をしてもらえますか?」。「長岡君か。5月の3日やね。はいはい」。賀川さんは、私にとっては頼みやすい同級生のような先輩です。当日の賀川さんは、話をしながらとても楽しそうでした。サッカーの話をするときはいつも楽しそうなんです。話を聞いた出席者は、「賀川さんの頭の中はどうなってんのや。ようあれだけ覚えてるな」というのが皆さんのが感想です。

それからもう一つ、頭が柔らかいということです。1988年、イギリスのイートン校が、親善試合にやってきました。しばらくして、今度はこちらの方がイートン校を訪ねて親善試合をしようという話が持ち上がって、一中の主だった方々にお集まりいただきました。その時のことですが、中には賀川さんの先輩で元日本代表の方もいらっしゃいました。賀川さんことを「ヒロっちゃん」というて、和やかな会議です。その会議で、OB会の会則の文言が、賀川さんの発案で一部加わったんです。



どこかというと、これです。「幹事会の承認を受けた卒業生」。これが加わったんです。賀川さんの言い分はこうなんです。一中では蹴球部でなくとも、昼休みにみんなグラウンドで球蹴りしていた。そういう人が上級学校に入学すると、「一中出身やろ。ボール蹴れるやろ」と言われて、蹴球部に入部して、旧制インターハイで活躍する。

「いまでもボール蹴ってるやないか。そういう人たちもこの際 OB に入つてもうたらええんや」と。おまけにですね、賀川さんはそうした人には「年会費の 10 年分を一括納入してもらって終身会員にしたらええんや」と。そうやなということで、何人も候補者の名前が挙がって、皆さんで勧誘していただいたんです。賀川さんは本当に頭が柔らかい。そのおかげで OB 会の収入が随分アップしたのを覚えています。

◆賀川浩さんのこと② 『ボールを蹴って 100 年』

それから、『ボールを蹴って 100 年』を持ってきました。一中・神戸高校蹴球部の 100 年誌です。これを賀川さんと一緒に編集した時の話をさせていただきます。

2013 年 8 月に、100 周年記念式典を開こう。2 年後の春に本を発行しようという話でした。

そこでどんな 100 年史をつくるかについて、賀川さんも交えて 25 人ぐらいの OB が集まって相談しました。そこで問題になったのは『神戸一中蹴球史』。一中の 25 年史なんです。これは先ほど出てきた河本春男先生。刈谷中学と東京高等師範学校でキャプテンをされ、卒業と同時に神戸一中に招かれ、在任 7 年間で全国優勝を 4 回されて、この本もまとめられたんです。東京高師の時の写真です。この校舎はいまはもうないんですね。

その後、『ボールを蹴って 50 年』が、私が入学した年にできました。この編集は大谷四郎さんと岩谷俊夫さんと賀川浩さんです。

この 2 つの部史をどのように活かして 100 年史をまとめるかというのが問題でした。私より若い OB は、「こんな 50 年史なんて見たことない。それを入れてもらえるんですか?」って言

うんです。私より上の先輩は、「また 50 年史をそのまま載せても無駄や。なんか工夫したいなあ」という話だったんです。そのとき賀川さんは、会の冒頭でこういうことをおっしゃったんです。「わかりやすいもの、世間に読んでもらえるものがいい」。これをヒントに、創部から 50 年については「先

OB会 会則 第3条（会員）

本会の会員は

神戸一中・神戸高校サッカー部に在籍した者、
神戸高校サッカー部の部長、部長に準ずる職務を担当する者、
及び幹事会の承認を受けた卒業生とする。
…（以下略）

河本春男先生 東京高師 2 年生



神戸高校一誠会館会議室での編集会議

輩の足跡」という題で卒業生のエピソードを交えながら綴ってはどうか、読んで楽しい「100年誌」にしようということに決まったんです。その後早速、賀川さんのお宅に編集委員8人がお邪魔して7時間ぐらい、12人の先輩のエピソードをいろいろ聞かせてもらいました。ただ、そこに出でこないOBの方もいらっしゃいます。賀川さんなど数人の方を加えることにして作業を始めました。

毎月編集会議を開きました。場所は、神戸高校の一誠会館会議室です。横に資料室があって、本当にいっぱい資料が置いてあるんです。賀川さんは、ここに出席された時ですけど、鼻が利くんです。棚の中から1冊出してきて、自分の机に広げてパラパラめくって、「あつ出とうわ」と言うわけです。何が出てるか。蹴球部に白洲次郎が2年生から5年生までいたことが出てるんです。白洲次郎が5年生の時の校友会誌にもちゃんと「白洲次郎」と出ています。野球調べてみると、白洲次郎はこれら入っています。当時は、夏はサッカーです。ところが5年生名前がないんです。白洲次郎の「ても、野球部5年級では名前がないか」。鼻が利くんですね。も見つけないのに、賀川さんはまう。

2015年春に100年誌発行予定だったのですが、他の章の原稿は次々とそろって出来上がったのに、「先輩の足跡」のところだけは遅れに遅れ、春から夏になり、秋が過ぎていきました。そして11月の初めに、やっと最終手直しです。110ページの原稿を賀川さんのお宅に持参して、「最終の手直しをお願いしたいです」。賀川さんは「今日中なんや

名前がなし

野球部五年級白洲次郎の名なし



任期は2016年2月まで

2年前の百周年記念式典の様子 100年誌の冒頭部分に

日本サッカー協会は、今年で85周年を慶祝いたします。この8月10日で85周年目に入りますが、博多一中・福岡高校のサッカー部はそれよりも歴史が古いうちからここで、日本で1-2の実績を誇る名門タメ

早く梅沢申し上げます。ありがとうございます。日本サッカー協会では、御前市までにワールドカップをもう一度日本で、今度は卓識でやろうと思っています。そこで在日代表チームが復帰する

な？」って聞かれるんです。「はい。今日中です。すいません、お願ひします」ってお願いしました。急ぐ必要があったんです。2年前の100周年記念式典の来賓挨拶。JFA会長の大仁さんの挨拶が出ていました。ところが任期は年が明けた2月までだったんです。だから急ぎです。賀川さんのお宅にお邪魔したのは朝の9時でしたけど、鉛筆を持つと人が変わるんです。すごいんです。9時から始めて、途中サンドイッチ、コーヒー、紅茶、日本茶を取りながらも黙々とです。私と話なんかしないです。ずっとです。終わったのが20時です。「何か食べに出ましようか」と私が言うと、賀川さんは「疲れた。今日は寝るわ」。その時、賀川さんはもうすぐ91歳という年齢です。鉛筆を持つと人が変わる賀川さんのおかげでですね、めでたく大仁さんの在任中に発行できました。「先輩の足跡」はそういう資料です。

賀川さんは、「100年誌に寄稿するわ」って。原稿とね、古びた手紙を送ってされました。手紙は、蹴球部の1年先輩が、兵学校を卒業して訪ねて来たんです。ところが賀川さんは留守だったんです。そこで、机の上にあった美濃紙にしたためた手紙なんです。手紙には昭和19年3月「神戸を発つ日に」と書かれています。賀川さんはこの手紙をずっと大事に持ち続けてこられたということです。10年前のことですから、70年間も持つておられた。

別の話でこういうこともありました。1985年。神戸高校の創立記念日に講演をしていただいたんです。題は「スポーツを通して見た世界」。賀川さんはどうされたかというと、テープレコーダー



The book cover features the title '先輩の足跡' in large, bold, serif font, with the subtitle 'Rediscover our soccer friends' past glories' in a smaller, sans-serif font below it. A soccer ball graphic is positioned to the right of the subtitle.

アーガル先生	岩谷俊夫（一中44回）
スポーツマンシップの種をまく	24
範多龍平（一中19回）	日本代表主将だった
英國の血を引く大日本蹴球協會理事長	優しい少年サッカー指導者 83
白洲次郎（一中22回）	鶴田正憲（一中45回）
吉田茂首相の懐刀	センタリング抜群の名選手 95
若林竹雄（一中26回）	高山忠雄先生（一中23回）
国際試合日本初のハットトリック	第9回極東大会の日本代表
右近徳太郎（一中32回）	新生・神戸高校の初代校長で
ベルリン・オリンピックで同点弾	サッカー部監督 101
河本春男先生（東京高等師範学校卒）	加藤正信（一中31回）
選手の指導と会社経営に	サッカーの普及と振興に
手腕を發揮したサッカーマン	半生を捧げたドクター 114
二宮洋一（一中36回）	大仁邦彌（神高15回）
戦前のサッカー人気の	第13代日本サッカー協会会長 128
中心として輝いたストライカー	岡本 純（神高27回）
大谷四郎（一中37回）	Jリーグ誕生の裏方 131
生涯スポーツ記者として活躍	参考文献 134
日本サッカーの発展に寄与した	座談会（14回生～16回生） 136
賀川太郎（一中41回）	
天覧試合3度経験	
60歳を超えてなおも	
公式戦でプレーした戦中流の名選手	71
賀川 浩（一中43回）	
日本人初の快挙！！	
FIFA会長賞を受賞した	
“サッカー記者”	76

一を持ってきて流すんです。流れてきたのは何かというと、「うわあ」「ああっ」という声、1970年のワールドカップのスタジアムの叫び、どよめきなんです。それで賀川さんは、「この時ブラジルの人は、ここに来たのは叫ぶためだといった」と。さらにまたですね、「ペナルティーキックをゴールキーパーが止めると、アナウンサーが涙を流しながら、止めた～止めた～と絶叫する」と。世界の人がエキサイトして楽しんでいる様子を話されました。

ただその一方で、こういう話もされました。アムステルダムオリンピックの水泳選手で、サンケイスポーツの先輩の木村象雷さんの言葉です。「スポーツは世の中が平和である限り盛んになる」。これを挙げられたんです。「自分は残念なことに、中学5年生の時、県大会で勝ったが、全国大会は戦争のためになくなった。旧制高校でも同じ経験をした」。そう生徒に話されました。賀川さんにはサッカーの楽しい思い出が詰まっている一方、暗い時代の思い出も尾を引いているということを感じました。

◆賀川浩さんのこと③ 色紙

最後に「色紙」のお話をしたいと思います。5年ほど前に、私の審判友達の奥澤浩さんという方に、賀川さんの色紙をもらつてほしいと頼まれました。私は賀川さんに会いに行く時に大好きな饅頭を持って行きました。ニコニコ顔で入れてくださいました。私は奥澤さんという方がどんな人なのかを紹介します。私と

賀川浩さん(一中43回)	2013年8月 百周年記念祭 2015年春 百年誌発行予定
<ul style="list-style-type: none">○ OB会・楽しそうに話す<ul style="list-style-type: none">・頭が柔らかい○『ボールを蹴って100年』<ul style="list-style-type: none">・分かりやすいもの・世間に読んでもらえるもの⇒ 前50年を「先輩の足跡」・定期編集会議 鼻が利く・2015年11月 最終手直し○ 色紙	<p>卒業生の16人 エピソードと 賀川さんも百年誌に寄稿 2015年12月1日発行 栃木の友人に頼まれ お願い</p>

ほぼ同じ年齢で、昔一級審判員昇格試験と一緒に受けたんです。ところが彼は不合格。でもその後ずっと栃木で審判活動を続け、70歳を過ぎても現役で、すでに担当した公式試合は四千数百を数えます。そんな人ですと言うと、賀川さんは「そういう人が日本のサッカーを支えているんでね」と言って色紙を2枚書いてくださいました。色紙に何と書かれたか。これはご存じの方も多いかと思いますが、「サッカーワン歳」です。いまにして思えば、賀川さんに「何ででそう書かれるんですか?」と聞いたらよかったです。どんな思いだったのでしょうか。

さて、今日のシンポジウムのテーマですけど「賀川さんから受け取ったもの」です。私にとってはサッカーのことを話されるときの賀川さんの顔ですね、楽しそうな。それが一番だと。

最後にお願いをひとつ。今日『ボールを蹴って100年』を20冊持ってきてました。ご興味のある方は、シンポジウムのあとに購入して読んでください。「先輩の足跡」が全体の1/4で110ページあります。また、お知り合いの方へのクリスマスプレゼントとしてもよいと思います(笑)。1冊1,500円です。(注、購入ご希望の方は、nfootball0511@gmail.com 長岡康規まで連絡してください)

どうもありがとうございます。

本多：長岡先生、どうもありがとうございました。皆さんぜひお買い上げいただいて、クリスマスプレゼントとしてお持ちください。

2. 稲垣康介ースポーツ記者の後輩として

本多：続きまして、朝日新聞編集委員の稻垣さんです。「稻垣さんはロンドンにおけるんやなあ」と、後輩の活躍を嬉しそうにお話する賀川さんはちょっと羨ましいという思いも持ちながら稻垣さんと話されていましたのかなという印象があります。では、よろしくお願ひいたします。

皆さんこんにちは。朝日新聞でスポーツ記者をしております稻垣康介と申します。

賀川さんとの思い出と、今日は「次世代につなげるために」というテーマなので、スポーツ記者の後輩として自分が賀川さんから学んだことを中心にお話させていただこうと思います。



◆賀川さんとの思い出

私が賀川さんと初めてきちんとご挨拶をしたのは、2006年ドイツのワールドカップの取材だったと思います。当時、賀川さんは本当に元気に取材をされていて、紹介されて少しお話させていただいたのが最初でした。濃密にお付き合いさせていただくようになったのは2011年です。この時、朝日新聞でジャーナリスト列伝という企画があり、その中で自分はぜひ賀川さんを取り上げたいと思い、13回ほど連載をしました。もちろん賀川サッカーライブラーWeb版の中にかなりのものがあるんですけど、そこにはないものをエピソードとして入れていきたいという思いから、当時芦屋に住んでいらした賀川さんの家にかなり頻繁に通いました。

早朝の新幹線で東京から芦屋まで行き、芦屋の駅でお弁当を賀川さんの分と一緒に買って、10時ぐらいに着いて2時間ほどいろいろ話を聞く。じゃあちょっととお昼にしようということでお弁当を食べながら、賀川さんはとりあえず紅茶とかケーキを買ってきてくださっていて、それを食べてまた5~6時ぐらいまで延々と。一日7時間ぐらいそこで喋るんです。そろそろ帰ろうかなというときに、じゃあ芦屋の駅で飯でも食っていくかっていうんで、芦屋の駅前のレストランに入って、僕はビールを飲みながら、賀川さんはご飯を食べながら、またそこでひとしきり話を聞くというのを7~8回ぐらいやりました。

そこで実現したのが2018年の連載でした。ちょうどこの年の8月、私は当時79歳だった父を亡くしました。父は賀川さんより8歳ぐらい下なんんですけど。ちょうど父が亡くなった2週間後からこの連載が始まったので、自分の中では父への思いもありながら、賀川さんの人生を一度振り返ることができました。自分の記者人生も三十数年になりますが、ある意味自分の一番の自信作として残っているものです。

賀川さんとはそこからは頻繁に、何かあると携帯に電話をするようになりました。2010年ごろ、私は年間3~4ヶ月は日本を離れてヨーロッパやオリンピックの取材で海外に出ることが多かったんですが、2017年から二回目のロンドン駐在になり、ヨーロッパを中心にいろいろ取材するようになりました。私は小国フェチと言いますか、フィンランドやアイスランド、ジブラルタルやサンマリノといった小さい国のサッカーの代表チームを巡るのが一つのライフワークになっています。その取材に行く前は必ず賀川さんの携帯に電話し、現地に着くと「こんなところでしたよ」とか「こんな取材をしました」ということを賀川さんに報告するのが常でした。自分の方が賀川さんより語学もできるしインターネットも使えるので情報収集力は僕の方があるはずなんんですけど、賀川さんが「そういえばこの

国はこういうのがあったやろ」みたいなことをおっしゃいます。自分が知らないことを賀川さんから聞かされるので、悔しくなってというか、また翌日にそこの戦争博物館に行ったり現地に追加取材に行つたというのもいい思い出になっています。

賀川さんと最後にじっくり話させていただいたのは、2020年の1月だったと思います。コロナ禍の直前で、私が卓球の全日本選手権からの取材の後に社に寄って、いつものように本多さんに連絡します。そのころはもう施設に入られていましたが、施設の道路の向かいにあるロイヤルホストで待ち合わせをして、本多さんとはそこで「じゃあよろしく」ということで、僕と賀川さんが差しになりました。東京オリンピックはコロナ禍で1年間延期になったんですけど、2020年の東京オリンピックについてというテーマで聞きました。

賀川さんは、なかなかオリンピックを現場で取材することはなかったようですが、僕は2021年で12回目になるんです。オリンピックの話をすると、先ほどの本多さんの話にもあったように、珍しく賀川さんの方から色々聞いてくるようなことがあって、その時だけはちょっと自分が得意げに話したりすることもありました。

1936年のベルリンオリンピックの頃から賀川さんとオリンピックの思い出については聞いており、記事にも書いたんですけど。「1936年というとな、2・26事件が起きた日で、あの事件の日は僕の住んでる神戸も雪が降ったから覚えてるな」という話がありました。2020年のロイヤルホストにいるんですけど、自分はいまどきの時代に生きてるのだろうと、賀川さんと話をしてるとタイムマシンに乗ったような思いに駆られることがすごくありました。

僕も1986年とか1990年の、自分が高校や大学時代のワールドカップのことは事細かに覚えているんですけど、カタール大会とか、最近の大会で覚えていることがなくなっています。昔のことになればなるほど鮮明に記憶が蘇るのが、晩年の賀川さんだったかなと思います。

◆1974年西ドイツ大会の取材

最近は新聞業界と言いますが、活字メディアはオールドメディアと言われ、非常にうつむきがちな感じですけど。賀川さんだったらきっとこういった時代でもどんどん何か新しいことを開いたんだろうなど感じことがあります。

賀川さんは1974年、ご自身が49歳のとき初めて西ドイツのワールドカップに行かれました。そのときの肩書きは、大沢さんのほうがもちろんご存知でしょうけど、サンケイスポーツ大阪本社の編集局次長です。普通だったら社内でデスクの仕事をしなきゃいけませんが、1970年に行けなかつた思いをぶつけるために理論武装されて、自分でかけあって、大会中、記事の下に広告を出してくれる企業を見つけてきて、航空運賃やホテル代も自腹で出されます。「会社には損はさせない。いい記事を書く自信がある」ということを編集局長に説得されて行ったということです。



当時はインターネットもない、パソコンもない時代です。当時は 1 行 15 字だったそうなんです。いまは 1 行 11 字ぐらいですが、連日 200 行ぐらいの記事をとにかく書き続けました。雨でプロ野球が中止となつたらさらにいい気になって書いたというのが、いまの若手記者からするとあり得ないというところでしょう。働き方改革という言葉はなく、働いて、働いて、働いて。ワークライフバランスというか、本当にライフゾフトボールというか。ライフゾフトボールライティングというか。今日は共同通信でデスクをされている出嶋さんも来られてますが、いま賀川さんの哲学を若手に言うと、ちょっとパワハラになってしまふかも知れません。少なくとも賀川さんにとっては、現場で記事を書くことが何よりも楽しいというところでしょうか。そのあたりは 1992 年に記者になった私にはまだ通じる哲学だと思います。

◆記者としての生き方

記者としての生き方ということでよく覚えているのが、「限られた情報の中で、点を線にする作業が面白い」ということです。いまはインターネットで情報が溢れていますけど、逆に「情報を取捨選択する力が問われますな」ということを言われていました。同じ現場にいても、視点があるなしで実は見えるものは全く違います。知識、興味、好奇心、そこで探すんだというのは賀川さんのアドバイスとして覚えています。

海外にせっかく出張に行ったのに、空港からホテルに行って、そこからスタジアムに行って。そんな「点を結ぶ取材」なんでしたって何にも面白くないだろうと。そこに行ったら戦争博物館や美術館に行ったり、市場でどんな野菜を売ってるのかとか、それをやってはじめて原稿に深みが出るもんだというのは、賀川さんからいつも言われたのを覚えています。

もう一つ、ライターとして記憶に残っているのは、物事を単純な善悪の二元論で語るのはよくない、視野が狭くなりがちになるということです。先ほど本多さんもおっしゃっていましたけど、あの独特の関西弁で、やっぱりユーモアがある。共感を広げるには、真正面から批判してどんな問題があると言ってもなかなか人には伝わらない。これは賀川さんの独特的ユーモアがあったからこそ、読んでる人の心をちゃんと捉えて揺さぶるのかなと思います。

すごく印象的なのが 2 つあります。有名な話ですけど、2002FIFA ワールドカップ日韓共催が決まった時に、日本の中でも FIFA の憲章には複数国開催はないんだから、あくまでも単独開催を主張すべきだという、いわゆる主戦論みたいなのがありました。だいぶ後になってから、賀川さんに聞いた言葉で、これは当時チューリヒにいた長沼さんには話されていたことですけど、「FIFA とはそもそもサッカーを世界で盛んにするためにできた組織のはずや。アジアの 2 カ国がいがみ合って、どっちかが勝つたら FIFA も困るやん。欧洲の理事にしたら、入れ替わり立ち替わり日韓が頼みに来てもうるさくてかなわんよ。両方にやらせたらええとなるわけよ」。なんかそういうようなスタンスというのは賀川さんらしいなと思いました。

オリンピックの話をする時に、これもオリンピック憲章で、オリンピックは個人やチームの対抗戦であって、国別対抗戦ではないというのがあるんですけど、実際には国別対抗戦でメダル至上主義で国威発揚のためにやっているところがある。全体主義国家、プーチンさんや習近平さんがメダルを取って国威発揚、求心力を高めるためにやるんだということをメディアも批判します。けど賀川さんはもう少し鷹揚なんですね。「その国家は民だからね。自分の村の一番速い子が隣の村の子に徒競走で勝つたら嬉しいでしょ。それと同じですよ」。やはり特攻隊というところに戦時中いた経験から、「殺し合う戦争とは違う。捕虜になるわけでもない。オリンピックも所詮は遊びだ。人類にとって得なことが多い」。それが賀川さんの言葉でした。自分もオリンピックを長年取材している時に、なんか困った時によく賀川さんに聞いてたんですけど、すごく印象に残っているのがこの言葉です。

昨日まで私はミラノ、コルティナの事前取材に行ってまして、帰ってきたところなんんですけど、アイスホッケーの日本代表の取材で、フランスのダンケルクというところに行っていました。そこも西部戦線というか、第2次世界大戦中、ドイツやイギリスも含めて戦った場所で、街にはそういったものが残っていました。やっぱり海外に行くと、賀川さんだったらこういったところも行くだろうなというのを思いながら訪ねることにしています。

今年は戦後80年という節目で企画したのは、鹿屋基地から飛び立って亡くなられた方が908人いるんです。その中にスキーのジャンプで全日本チャンピオンになり、幻になった1940年の札幌オリンピックの代表候補だった森史郎という人がいたんです。その人の家族、孫の世代はいまなおオリンピックに出たりするスキー一家です。その森史郎さんの物語から特攻隊というものを取材し、記事にすることがありました。森史郎さんは22歳のとき、1945年5月11日に鹿屋から沖縄に飛び立たれて亡くなったんですけど、ほとんど賀川さんと同年代です。私たちは賀川さんが、あの戦争が終わって復員され、1952年に記者になられて、その後こういった形で日本サッカーの発展やサッカーの楽しさを私たち後輩に伝えていったのは本当に幸運だったなと思っています。

いま自分は57歳ですけど、賀川さんでいえば初のワールドカップが49歳で、1982年のスペイン大会あたりが僕の年です。賀川さんのワールドカップ取材歴からすればまだ前半戦だと思うので、元気で現場にいられることに感謝しながら、賀川さんだったらこんなことをするんじゃないかな、こういったことを取材して記事に書いたら褒められてももらえるかなと思いながら続けていきたいと思います。

今日はありがとうございました。

3. 田村修一賀川さんを受け継ぐとは

本多：賀川さんのところには記者志望、ライターになりたいという若者がたくさん来ていたんですけど、そういう人と話をする時に賀川さんは必ず2つ聞くんです。最初に聞くのは。「あんたは記者になりたいのか。サッカー記者になりたいのか」というお話です。その次に聞くのは「で、あんたは言葉が何ヶ国語できるんや」ということです。だいたい「英語もちょっと難しいです」って話になるんですけど。

その時いつも話をするのが「田村修一という記者がおってなあ」という話でした。

続きましては、フットボール・アナリストの田村さんです。よろしくお願ひいたします。



◆とても大きな存在

ご紹介に預かりました田村修一です。フットボール・アナリストと名乗っていますが、日本だとライター、海外向けにはジャーナリストということになります。

僕も稻垣さんと同じように、賀川さんと面と向かって一緒にいた時間はそんなに長くはないのですが、僕にとって賀川さんはとても大きな影響を受けた人です。賀川さんから学び、賀川さんを目標としてずっと意識していました。そういうことを少し話させていただけたらと思います。

先ほどの本多さんの写真もありましたけれども、賀川さんも最初から髪の毛が白かったわけではなくて、当たり前ですが若い頃は黒かったんですね。書かれたものは以前から読んでいましたが、最初にお会いしたのは1992年です。そのころの賀川さんは産経を退職されてフリーという立場でした。

当時Jリーグが発足するということで、新しいサッカー雑誌がいくつか出来まして、その中に『ジェイレブ』という雑誌がありました。数年で終わってしまったのですが、そこで賀川さんは富樫洋一さんと一緒に顧問をやっておられ、原稿も書かれていました。僕はその編集部にライターとして参加することになり、その編集会議でお会いしたのが最初です。だからその時は、髪の毛はすでに真っ白でした。その後、後藤健生さんのお宅にお邪魔して昔のアルバムを見ていた時に、アルゼンチンワールドカップ当時の賀川さんの写真があって、髪の毛が黒かったので結構びっくりしました。髪の白い人という認識でずっといたので、新鮮だった印象があります。

最初の編集会議の時は緊張していて、たぶんそのせいもあって、前の晩からお酒を飲んで寝たら、翌朝すっきり起きれるだろうと思って飲み始めたら、止まらなくなってしまった。結構深酒をして、相当ブンブン酒臭くしてたと思うんです。だけど賀川さんは大人なのでそういうことは何も言わずに、普通に対応していただきました。当時の僕にとって、賀川さんは雲の上の人でした。

学生の頃はスポーツ新聞を読む習慣がなかったので、新聞で賀川さんの記事はほとんど読んだことはなかったけれども、サッカーマガジンを通じて賀川さんの文章をずっと読んでいました。他の人とテイストが全然違う。リズムやテンポも違う。サッカーでもこんな文章が書けるんだというのがありました。スポーツあるいはサッカーの捉え方が、ピッチの上だけでなく、もっと大きなものとして捉えていて、そこまで含めてスポーツなんだと。当時はそこまではつきりとは意識していませんでしたが。そんなスポーツの捉え方があつていいくんだということや、そこから生まれる文章の余韻がとてもいいなと思い、すごく惹かれました。

たぶん僕は、賀川さんみたいな文章をいつか書きたいと、その頃から思ってはいたんです。けれども当時は、今よりずっととんがっていました。サッカーでも論理的に突き詰めたいという意識がすごく強く、論理を構築していったらどこまで遠くまで行けるか、行けるところまで行きたいという思いがありました。だから賀川さんのように余韻のある文章を書いたり行間から読ませるのはもっと先、年を取ってからのことだと思っていました。

では、読者に誰を想定したかというと、それは牛木さんや賀川さんでした。賀川さんがこの文章を読むんだと考えて、自分が空っぽになるまですべてを出し尽くす。それを賀川さんが見てどう思うか。そういうスタンスで、ずっと文章を書いていました。

◆賀川さんが教えてくれたこと

賀川さんから影響を受けたことで思い出深いのは、Jリーグで取材活動をしていたころのことです。1992年の冬にサンパウロFCとバルセロナのトヨタカップがあって、その時に賀川さんがサンパウロの監督をしていたテレ・サンターナにインタビューをすることになり、なぜか僕も一緒にについていったんです。現在のFC東京の小平グラウンドだったと思います。そこでサンパウロFCが練習をしていて、練習後に、賀川さんが通訳付きでテレ・サンターナにインタビューをしました。通訳はポルトガル大使館で働いていた古賀さんという女性です。

その2、3日前だったと思います。突然賀川さんからファックスが送られてきました。何の前触れもなく、何だろうなと思って見てみると、質問事項がページと書いてあったんです。100項目ぐらい、思いつく限りの質問が列記されていた。それを読んで、こういう質問もあるんだとか、自分だったら



考えつかないことが結構たくさんあり、こんなにいろいろなことを考えてからインタビューをするのだというのが、まず思ったことでした。

ただ、実際のインタビューではそれを全部聞くわけではなく、その中からかなり絞って聞くのですが、それでもかなり長時間になりました。そしてインタビューが終わった後すぐに、賀川さんは録音したテープを聞き直しました。それで通訳の方の言葉が曖昧だったり、ちょっとわかりにくかったところを、ここは本当はどう言っているのかとか、どうなってるのかと全部その場でチェックして、曖昧なものをひとつひとつなくしていった。それを僕はぼけーっと見ていただけですが、「仕事ってこういうふうにやるんだ」というのを賀川さんが教えてくれたんだと思いました。そういうことを教えてくれる人っていないんですよね。

僕はフリーランスでサッカージャーナリズムの世界に入ったので、新聞社に入社した人たちとは仕事の入り方とか、ものの考え方も全然違っていた。周りを見ても、誰かを見て学ぶ機会がそんなにあるわけではありませんし、基本的に誰も何も教えてくれない。フリーランスになるのは簡単で、名刺を作つて「フリーランス」の肩書をつければ、それでフリーランスのジャーナリストになってしまいます。そうは言ってもペーペーの人間と大ベテランの方とでは、実質は全然違うわけです。そんなペーペーの僕に、賀川さんはなぜか目をかけてくれたというか、仕事はこういうふうにするのだというということを教えてくれました。そういう度量というか、そういうことをしてくれた人は、賀川さんだけではありませんでしたが、ここまで真摯に突っ込んでやってくれた人は賀川さんだけです。すごく人間的な大きさというか、彼の凄さ、人柄を実感しました。

皆さんの言葉を聞いていて改めて思ったのは、賀川さんはものすごく大きな人だということです。僕にとってはイビチャ・オシムと同じぐらい、賀川さんは大きくてすごい人なんだなど。体の大きさはオシムとは全然違います。とても小さい人だけれども、人間的な大きさはものすごくある人だと思います。オシムの全体像とか、人によって具体的な評価が違いますよね。それは、目の不自由な人が象を手で触るようなもので、触る部分によって受け止め方がそれぞ違ってくるわけです。賀川さんも同じだと思います。あれだけ大きな人で、もちろんメインはサッカーだけれども、サッカーでもピッチの上だけに限らない。文化的、社会的な大きな枠の中でサッカーを見る。あるいは逆に、サッカーからそちらの方へ広げていく。さらにサッカー以外のスポーツとの関わり。社会との関わり。そういう部分ですよね。全体として受け止めるのが、賀川さんは大きすぎて大変な人だと思います。

では自分の場合は、どういうところで彼を受け止めていったらいいのかと考えた時に、やはりジャーナリストの大先輩として、どういう文章を書くかということでした。

それからもうひとつは、本多さんもおっしゃいましたが、賀川さんの世界への関わり、世界への興味という部分です。賀川さんは「鼻が利く」ということを先ほどどなたかおっしゃられていましたが、僕はたまたまフランス語ができたので、そういうものを賀川さんが感じられて、ある程度目をかけてくださったのかなという思いがあります。だから日本以外のフランスはじめとするヨーロッパやアフリカの話をするとすごく喜ぶんです。

僕はフランスへの関わりを深めていき、それは他の方々のやり方とは全然違っていました。新聞社の方は、海外に行った時に日常的な仕事量がものすごく多いので、なかなか現地の記者と仲良く深い関係になれない。稻垣さんはちょっと別です。あなたは特別な人だと思っています。僕がどうしたかと言うと、まずそこを考えました。どうしたら彼らとまともに話ができるようになるのか、どうしたら彼らと対等な関係が結べるのかということです。それでフランスの記者たちの間に入り込んでいく、結果的にフランスフットボール誌とか、レキップ紙の人とはかなり親しくなりました。今はもう辞めた人が多いのですが、少し前はそういう友達がみんな偉くなっていた時期なので、結構いろいろ便宜を図ってくれました。「じゃあジダンのインタビューお願いするね」とか「デシャンのインタビューお願いするね」と言うと彼らがやってくれる。それも選手への取材謝礼は一切なしに、彼らへ

の原稿料だけで日本の雑誌のためにインタビューをやってくれる。そういう関係を築くことができたのも、賀川さんから学んだことが大きかったのかなと思っています。

◆賀川さんを受け継ぐことはできるのか

賀川さんを、賀川さんのやられたことを受け継いでいくのを考えたときに、僕は賀川さんからここまで述べてきたように学びましたが、僕が誰かに賀川さんと同じことをしているかと言ったら全然やっています。僕はいま 67 歳で、最初に会った 1992 年の時、賀川さんはすでにそのくらいのお年でした。1994 年のワールドカップでは賀川さんは 70 歳で、ジェイレブに「フライングセブンティ」という短期連載を掲載しました。当時の僕にはすごく年を召していらっしゃった印象で、「(この世界に入ってまだ間もないのに) 僕ももう 35 歳です」と言ったら、「何やまだわしの半分やんけ」みたいに言われたのをよく覚えています。もうすぐ僕も、あのときの賀川さんと同じ歳になりますが、ではこれから先、何をやつたらいいのかと考えた時に、賀川さんと同じようなことができる自信はありません。

こんなこと言うのは何ですけれども、仕事のためにヨーロッパに住んだり、元々ヨーロッパにいて日本のメディアで仕事をしている人は結構たくさんいますが、海外に住んでいても、目は内向きになります。日本人の情報を見つけて日本に送ることがメインの仕事で、それ以外のことはあまりやっていないという印象です。特にフリーランスで仕事をしている人は、経済的な面など切実な問題があるから、お金になる仕事をやらなければいけません。そうなりがちだとは思いますが、それだとなかなか意識が外には広がっていない。それでも世界とつながってコミュニケーションが取れていると思います。

例えばインターネットとか見ていると、一方的に情報を仕入れる、伝えるだけで世界とつながっている気になる。実際、情報面ではつながっていても、そこに本当にコミュニケーションがあるかといえば、それは全然違うと思います。生の付き合いというか、つながりがあって初めて相互理解ができるわけで、情報だけで世界で知った気になるというのとは全く違うと思います。いま日本でこれだけ情報があふれても、実際はどうかと言ったら、逆に世界の現実、生の世界からは遠ざかっている。

たぶん賀川さんは、そういうことをよくわかっていたと思います。賀川さんとこういう話をしたことはあまりありませんが、賀川さんの原稿やスタンスを見ていると、世界とどうつながっていくかということを、はつきりと問題として意識したうえで仕事をなさっていたのだろうと僕は思っています。

最後に、賀川さんをはじめ、ここまで名前が出てきた岩谷俊夫さんや大谷四郎さん、あるいは川本泰三さん。そういう人たちの名前を賀川さんはすごく頻繁に口にされていました。賀川さんが名前を出すことによって、そういう人たちのことが語り継がれてきたわけです。僕らにとってそれは継承であり、それはやはり賀川さんだからできたことだと思います。

繰り返しになりますが、賀川さんを受け継ぐことはできるのか。僕は、それは無理だと思っています。賀川さんの全てを受け継ぐことは無理だと。ではそれぞれの人たちが、自分が思っている賀川さんをどう受け継いでいくのか。そういうことでしかないのだと思います。

賀川さんを自分たちの中に常に留めておく。常に賀川さんを意識することによって、賀川さんが僕たちの中に生き続ける。次の世代にどれだけ伝えられるかは別として、僕たちがやっていかなければいけないことかなと思います。

4. 大澤謙一郎——賀川浩さんとサンケイスポーツ

本多：今日のスピーカーの中で賀川さんの直接の後輩が二人いらっしゃると紹介させていただきました。もう一人の直接の後輩は、サンケイスポーツ文化部長の大澤さんです。賀川さんは最後は自分で執筆するのが大変になっていましたが、その時に賀川さんに寄り添って、最後まで執筆活動をささえていただいたのが大澤さんです。

賀川さんは「仲間」という言葉を用いていたとお話ししましたけれども、大澤さんとの関係は先輩・後輩で、仲間というよりも「後輩」って言うときの方が賀川さんとしては親密な、また違う関係があったと感じていました。では大澤さん、よろしくお願ひします。

◆自己紹介

サンケイスポーツの大澤と申します。2024年の4月に東京に転勤になりました。簡単に自己紹介させていただきます。

53歳です。生まれは京都で。1995年にサンスポに入りました。サッカーだけ取材してきたわけじゃありません。高校野球を取材したり、福岡に転勤になってダイエーホークス

(現ソフトバンクホークス) で王貞治さんが監督のときに担当しました。

サッカー担当は2001年から6年ぐらいやりました。2002年の日韓ワールドカップのときは日本代表の担当で、野球でも2006年のWBCの第1回を担当をしております。長く大阪にいたので阪神を中心に取材してまして、阪神担当キャップやデスクをやり、運動部長をやり、その後文化部長にもなって芸能を取材し、2024年4月から東京に転勤になり、東京と大阪のサンケイスポーツの文化部長を兼務しております。高校までサッカーをちゃんとしました。修学院フィットボールクラブの出身で、そこでコーチもしておりました。息子二人が神戸SS、神戸FC出身ですので、賀川さんが作られたチームでプレーしておりました。

大阪にいた時はまだ現役で、京都の社会人でプレーをしていました。ただ東京に来てからそういう機会がないので、OBの方とかシニアの試合で欠員が出たら声かけいただけたらなと思ってこのスライドを作りました。サッカーしたいなといまでも思っております。

◆賀川さんとの出会い

賀川さんとは2001年にサッカー担当になったときに、長居の第2競技場やったと思うんですけど、セレッソ大阪と名古屋グランパスの試合があって取材に行った時に初めてお会いしました。



A small photograph of a man in a blue soccer uniform with the number 19, playing soccer on a field.
A small photograph of a man in a grey shirt and blue pants running.

大澤謙一郎(53)

京都市出身、東は神戸東京単身赴任中

95年サンケイスポーツ入社（大阪）
97年～99年ダイエーホークス担当
01～06年サッカー担当
2002年日韓ワールドカップ取材
06年第1回WBC特派員
07年オリックス担当
08年阪神担当キャップ
09～18年運動部デスク（主に阪神）
19年運動部長
21年文化報道部長
24年4月～東京サンスポ文化部長

京都・修学院フィットボールクラブ出身
同クラブでコーチ経験あり

息子2人が神戸SS、神戸FC出身

「すごく若いな。君は木村象雷を知らんのか」と言われました。知ってるはずないんですけど、1928年アムステルダム五輪の背泳ぎの選手でオリンピアン。賀川さんの上司だったサンケイの先輩です。いろんな話ををしていただきました。

この日の試合後の取材はかなり印象に残っています。当時ジョン・カルロス監督がいて、ストイコビッチがいました。記者会見で一番前に座った賀川さんは一所懸命質問してはったんです。ジョン・カルロスも賀川さんことを認識していて、ものすごくリスペクトしながら答えてはって。その後、ストイコビッチが帰るときにも賀川さんが行って取材しています。ストイコビッチも賀川さんの方が明らかにわかっている感じで、丁寧に答えていました。「賀川浩ってすごいな」と思いました。僕もサッカーやってましたし、サッカーマガジンの賀川さんの記事は読んでいて賀川さんことは知っていましたので、サンケイスポーツに入った時には「あの賀川浩の後輩になるんや」と思ってました。

この写真（ディエゴ・马拉ドーナとの2ショット）は有名ですね。僕、記者になっていろんなところに行くんですけど、この写真が羨ましくて。僕も記者人生でいろんな人と写真を撮ってもらうようになっています。後々こういう写真が記念で値打ちが出てくるんだなというのがわかりましたので、王さんと写真を撮ってもらったり、いま芸能界を取材しているので田原俊彦さんと写真を撮ったり、ピンク・レディーの未唯 mieちゃんと写真を撮ってもらったりしています。

産経新聞社のデータベースから賀川さんの写真を引っ張ってきたんですけど、最新の写真がこれですね。産経新聞の企画で澤穂希さんと対談したのが2022年2月18日、この時98歳でしたね。年齢が年齢なので体調がすぐれないときもあるんですが、このときは澤さんにお会いできるということで、非常に元気でした。

僕が賀川さんとのお付き合いが深くなったのは、2015年の12月25日です。今日も来られていますが、私の友人の済木さんに、「賀川さんがFIFA会長賞を取らはったらしいですよ」というのを、確か前の日の晩のフットサルのときに聞いたんです。えー、すごいなと。けど



ディエゴ・马拉ドーナと



2024年2月18日
澤穂希さんと対談
98歳



FIFA会長賞って何？ 検索したら、2007年がペレ、2011年はアレックス・ファーガソン（マンチェスター・ユナイテッド監督）、2012年ベッケンバウアーと。こんなすごい人が受賞している賞です。ここに賀川さんが並ぶ。これはすごいということで裏を取りに行ったら「賀川文庫（神戸市中央図書館内にある賀川さんのサッカーの蔵書を寄託したスペース）におけるぞ」ということで行きました。

「そんなんくれると言うてるから、ちょっとスイスに行ってくるわ」みたいな話だったと思いますが、会社の方にかけ合いまして、まあこれは名誉なことなので記事にしましょうということでこういうふうに書きました。

これは東京の紙面なんですけど、大阪の方はちょっと手前味噌すぎるということで、あまり大きく扱ってなかつたんです。東京の方が大きく取り上げられましたね。

受賞されてスイスから帰ってきて、年明けに神戸で阪神大震災のチャリティーマッチで報告会があったんです。三浦カズさんが来て、賀川さんおめでとうございますと言うわけです。岡田武史さんも嬉しそうです。その後のパーティーでは釜本邦茂さんもうれしそうですね。調べて思ったんですけど、賀川さんと映ってる人ってみんなうれしそうなんです。

神戸FCのパーティーです。花束を渡しているのは実は僕の息子なんです。神戸FCでやっていたので、クラブの方に配慮していただいてプレゼンター役をやらせていただきました。宮本恒靖さんも嬉しそうですよね。





賀川さんって対談の本も出してらっしゃいますけど、本当に話を聞き出すのがお上手です。知識もたくさんあるので、向こうもしやべりやすいんでしょうけど、人の気持ちをつかむのが本当にお上手だなと思うんですね。

この写真はガンバ大阪がパナソニックスタジアムを完成した記念会談を野呂社長とさせていただいたときのものです。社長も亡くなられました。この対談の時、長谷川健太監督（当時）は関係ないんですけど、練習が終わってグラウンド走ってたら賀川さんがいるらしいと聞いて慌てて走ってきて、一緒に写真を撮ったということです。

◆賀川さんと阪神タイガース

皆さんサッカーの話をされてるんで、私はちょっと違う視点で話したいと思います。賀川さんと阪神タイガースということです。

今年タイガースは圧倒的な成績で優勝しました。これは東京の紙面ですけど、サンケイスポーツの大版は毎日、阪神の話題で1面を作っています。その流れを作ったのが賀川さんなんです。

2015年が阪神タイガースの80周年でした。何か記念の企画をしたいということで、賀川さんなら絶対阪神の話もできるからと、坂井信也オーナーと対談してもらうことになりました。坂井オーナーは神戸高校、神戸大学の出身で、賀川さんの中高大学の後輩なんです。坂井さんも賀川さんにぜひ一度会ってみたいとおっしゃっていたのでセッティングしました。この時は甲子園球場のオープン戦の日で、場所は貴賓室です。めったに入れないところです。一緒に行ってロビーに着いたら、向こうから吉田義男さんが来まして、「ご無沙汰しております」と。

賀川さんも「おお、よっさん元気かいな」。吉田さんは実はサンケイスポーツの評論家をしていた時期があったんです。向こうから来られました。阪神タイガース界隈でもこんなに顔が利くんや、サッカーだけちゃうんや。すごいなと思いました。



この対談は大成功で、僕も横で聞いててほんまにそうやなと思ったんです。「タイガースは世界一のビッグクラブ」とおっしゃり、坂井さんも喜んでおられました。どういうことかと言いますと、1990年代まで関西には4球団がありました。全て私鉄の球団です。ライバルやったんですけど、人気があったのは阪神だけ。何でかという話なんです。「阪神」というのは大阪の「阪」と神戸の「神」、150万都市とおっしゃつてましたけど、この名前が偶然にも社名に入っている。阪急は阪急電鉄。南海、近鉄とあるけど阪神だけが大阪と神戸というとんでもなく大きい街を勝手に社名に入れてダブルフランチャイズをしている。実際そうなんですよね。大阪と神戸の真ん中にある西宮という中途半端な地に甲子園球場を建てて、両方の都市をダブルフランチャイズにしています。こんなチームはサッカーではないと。例えとして、ちょっと距離感は違うと思いますけど、ロンドンとマンチェスターの間にスタジアムを作って、両方をホームタウンにしているようなもんやと。阪神は今までこそファンサービスをして強くなつていいチームになりましたけど、昔は努力を何もしないでこれに乗つかつていただけなんやと。地域密着というのは新聞もやらない手はないとおっしゃいました。

賀川さんが編集局長になる前は、スポーツ紙は、例えばスポニチは南海、日刊スポーツはボートレース、デイリーは阪神、報知は巨人だったんです。サンスポは中途半端で、創刊の紙面は1面が中日ドラゴンズ。何をやっていいかわからなかったんですけど、賀川さんが編集局長になったときに、新聞の地域密着を徹底してやり出して、阪神、阪神、阪神。これでシェアをずっと上げていって1位になり、いまでもその流れで1位を守っています。市場は縮小してしまいましたが、これは賀川さんイズムでずっとやってきてますので、そのままシェアを取っております。

東京の方にはなじみが薄いかもしれません、中村銳一さん、元祖阪神タレントです。いまは石を投げたら当たるぐらい阪神ファンのタレントが世の中にいますけど、そのはしりです。ABCラジオで、パーソナリティーをやっておられて、勝てば「六甲おろし」を歌うということを番組でやってらっしゃったそうです。この方がサンスポの1面でコラムを持って大人気になりました。これにもいくつかのいきさつがあります。

この方は参院選に出たんですけど落ちたんです。落ちた日に運動部長が「エイちゃんをサンスポの評論家に入れませんか」と声をかけたと。賀川さんが「それええやないか」ということで、編集局次長に「いまから行ってこい」と。「えっ、いまからですか」と編集局次長。「参院選に落ちた日ですよ」。賀川さんは「後



賀川さんと阪神タイガース（左は阪神坂井信也オーナー
当時2015年2月）

阪急ブレーブス（阪急電鉄）
南海ホークス（南海電鉄）
近鉄バファローズ（近畿日本鉄道）
阪神タイガース（阪神電鉄）
阪神は大阪、神戸という大都市を偶然にも社名に入っているのでダブルフランチャイズを実現している
世界一のビッグクラブ！
→地域密着の紙面をサンスポの1面は阪神、阪神、阪神！→シェア1位に



中村銳一氏
元ABCアナウンサー、参議院議員
元祖阪神タレント

「後家さん口説くにや通夜の夜というやろ。今から行ってこい」

サンスポ1面固定コラム
大人気に

新聞は地域密着

家さん口説くにや通夜の夜というやろ。いまから行ってこい。絶望の淵にいる時に声かけるんや」と。なるほどなあ。

そのあとにスポニチとともに話に行ったそうですが、最初に声をかけてくれたサンスポにお世話になりますということで、サンスポの評論家になりました。銚ちゃんは野球経験者ではありませんが、勝てば喜び、負ければともに泣く。ファンと同じ気持ちで書いてくださいということで、毎日毎日「トラコール」というコラムを書かれてものすごい人気になり、さらにシェアを上げていったということです。

新聞は地域密着だという考えはW杯取材から来ているそうです。1974年の西ドイツ大会に行かれて、当時は毎日は試合をやってなかつたので、合間に2部の練習場とか、そういうのも見に行かれたそうです。そしてそこの新聞も買わはるんです。地域には地域のニュースを載せる、それが一番バリューがあるということを学んできはつた。こういう考えもサッカーの海外取材から来ているそうです。

先ほど皆さんのお話にもありましたけど、サッカーだけを見るんじゃない。いろんなものを、いろんなところへ行って見て来なさいという賀川さんの考えは本当にそうやと思います。僕も後輩には言ってます、どこどこへ出張に行ったんやつたら、アレ見てきたかと。行ってませんと言つたら「何しに行ってんねん。時間作らんかい！」と。賀川さんから学んだことの1つとして言っています。

◆ワールドカップの連載をサンスポで

FIFA会長賞をもらったのが10年前ですから、90歳ちょっとですね。賀川さんはお元気でしたので、サンスポにもう1回記事を書いてもらえないかということで、2018年のロシア大会はアジア予選から全試合、観戦記を書いていただきました。結構大変やつたんですけど、反響はかなりあり、本大会も書いていただきました。

2017年秋には、「ワールドカップの旅」の再録ではないんですけど、クライフはこうやつたとか、ベッケンバウアーはこうやつたとか、そういうような連載を書いてもらいました。1986年のマラドーナの5人抜きのゴールは、僕は中学生やつたから何度もビデオで見てたんですけど、あの神の手と5人抜きのゴールを現場で見てはつたんやと。それを一眼レフで撮っていたとか、すごい話やなと思います。



2019年3月26日が、賀川さんの最後の日本代表の取材になりました。やっぱり一回ぐらいスタジアムに行ってもらいたいなと思ってましたんで、JFAにも話して、神戸ノエビアスタジアムで行われた日本一ボリビアに僕も一緒についていきました。

この時は試合前に、おなじみのサッカーライターの方にお会いされて懐かしいとお話しされていたので良かったなと思います。増島みどりさんがこの日いらっしゃって、協会の広報に「今日せっかく賀川さんが来られるのに何も渡さないの」「用意してません！」。増島さんが自分で花を買ってこられて協会に渡して「これ渡しなさいよ」と言ってくれたのがこの写真です。この日は記事も書いてもらって、タクシーに乗って家まで送り届けて部屋に入って、ベッドの横まで一緒に歩いて、じゃあ帰りますって帰りました。

連載とか書いてもらっていたものはほとんど終わっていましたが、次の2022年カタール大会がやつてきました。日本は初戦でドイツに勝ってコスタリカに負けた。賀川さんはスペイン戦を絶対見るやろということで、割と見やすい時間帯だったこともあり、家へ行って一緒に見ました。元気やったんいろいろな話を聞かせていただき、記事にしました。最後の記事ですね。

賀川さんにかかわった皆さんが共通して言わされることですが、賀川さんのサッカーの原稿は全て愛情にあふれていると思います。試合中は結構文句言いながら見てるんですけど、原稿を書くときは、悪いところよりもいいところを見つけて書くという姿勢やったと思います。

アジア予選の夜中の試合の前、「翌日に回しますか？」と聞いたことがあります。時差がありますので、夜9時開始というような試合があって、終わると11時の締切であまり時間がない。サンケイスポーツは、釜本さんの評論を翌日載せることがあったんです。その方がしっかり整理できるという理屈やったんです。僕はあまり好きやなかつたんですけど。賀川さんにも「試合開始が夜遅い試合はビデオに録っておいて次の日に見てそれでやりますか？」とお尋ねしたことがあったんです。すると一呼吸置いて、「新聞は新しく伝え聞くと書くやろ。締切までに試合が終わるんやったら、記事を入れるんは当たり前やわな」と。楽しそうと思った僕も悪かったと思いました。



森保一監督と 2019年03月26日 日本一ボリビア
@神戸ノエビアスタジアム 94歳



◆賀川さんの「本質を見る目」

賀川さんから受け継ぎたいものは「本質を見る目」やと思うんです。締切までに試合が終わるんやったら記事を入れるのは当たり前です。賀川さんの記事や人との接し方、いろんなところで学んだこ

とは、全てはここに通じているのかなと思いますね。「本質を見る目」があれば、やりたいことができるし、相手も話を聞いてもらえます。何が大切かを見る目というのは、賀川さんの全てだと、僕は勝手に思っております。

賀川さんという人間は4つの側面に分類できると思います。ここではあまり語られてなかつたかもしれません、まずは選手として素晴らしいところです。お兄さんだけじゃなく、賀川さんも第一線でプレーされ、技術・戦術論は確かです。二つ目はサンスポの賀川さん。サンスポでタイガースを取り上げてシェアを上げていく。新聞記者としての賀川さんです。三つ目がサッカージャーナリストとしての賀川さん。ここは皆さん語られた通りです。そして四つ目が神戸フットボールクラブを作られた賀川さん。すべてはここに繋がっているような気がします。サッカーの取材、たとえばデットマーク・クラマーさんを取材して聞いた話をどこかで生かしたいということですね。交流した話をいろいろ聞いたんですけど、とてもシンプルですよね。「日本のサッカーが強くなるためには、子どもがうまくならなあかんわな」とおっしゃってました。昔はサッカーを始めたのって中学とか高校からで遅かったんですね。世界では子どもからやっている。そういうことを、取材するだけでなく、自分に落とし込んで行動に移す。そういうことも「本質を見る目」につながっているんじゃないかなと思います。

◆賀川さんが亡くなられて

賀川さんは2024年12月にお亡くなりになりました。サンケイスポーツの1面で取り上げました。産経新聞社の社長が死んでもこんなに大きく取り上げることはあります。唯一無二の存在ということがよくわかると思います。

お葬式に行きました。斎場にも泊まらせてもらい、火葬場へも行き、骨になった賀川さんも見ました。びっくりしたんですけど、大腿骨がしっかりしてました。100歳前でも杖について歩いてはりましたよね。神戸高校には僕も何回か行ったことあるんですけど、すごい坂の斜面の上にあるんです。あの坂道を歩いてサッカーをやって、

夜中の試合は記事は翌日回しにします?

賀川さん
「新聞は新しく伝え聞くと書くやろ

締切までに試合が終わるんやったら
記事を入れるんは当たり前やわな」

賀川さんから受け継ぎたいもの
本質を見る目



2025年1月19日「賀川浩氏御生誕100年記念展示会」賀川さんの訃報を伝えるサンスポの記事を読む。神戸FCの選手ら - 神戸市・御影公会堂

世界中を駆け回って来られた賀川さんの足がこれなんやと思いました。

賀川さんがやってこられたことは僕らにはできませんけど、賀川さんから受け止めたことを伝えていくことはできると思います。亡くなった次の年に、神戸FCが開催した賀川さん「生誕100年記念展示会」の様子です。

思いがあれば通じていくと思います。どんな形でもいいので、一つでもいいので、賀川さんから受け継いだものがあれば、それぞれの方法でいろんな方に伝えてもらえたらしいかなと思います。

今日はどうもありがとうございました。

注) 本発表の写真はすべて産経新聞社から

5. 松永憲明一賀川さんが伝えたかったこと

本多：続きまして、元神戸市立中央図書館職員の松永さんです。賀川さんは、サッカーのことをお喋りするサロンを作りたいとずっと話されていました。ご自宅にサッカー好きが集まったり、いろんなことをやってましたけど。最終的に実現したのが、いま神戸市立中央図書館にある「神戸賀川サッカー文庫」です。そのお話を中心に松永さんからお願いしたいと思います。

◆神戸市立中央図書館と賀川サッカー文庫

賀川さんの出身地の神戸からやってまいりました松永です。7年前まで市立図書館で司書として勤務していました。皆さんが賀川さんのことをいろいろお話しされたので、私からはほとんど賀川さんご本人のことを喋らないことになりますがご了承ください。図書館の活動を通して賀川さんが伝えたかったことをお話しさせていただきたいと思います。

まず、私が36年間勤務した神戸市立中央図書館についてです。神戸市の図書館は政令指定都市では最も早い明治44（1911）年にJR神戸駅の近くで開設されました。約10年後の大正10年、賀川さんが生まれる少し前に、いまの大倉山に移転しました。当時の建物はすごく立派な、東洋一と言われた図書館だったんですが、阪神・淡路大震災で半壊となって取り壊しております。

しかし100年以上同じ場所に図書館があるので、いまも市民の方からは大倉山の図書館として親しまれています。現在の蔵書数102万冊、年間の入館者数45万人です。

サッカーと神戸市立図書館の関係です。2010年、あまりスポーツと関係ないんですけど国民読書年ということと、南アフリカでワールドカップが開催されたということもあり、全国のJリーグクラブのホームタウンにある図書館とJリーグクラブとの間で、地域活性化に向けた取り組みが始まりました。

ここに来られている方はよくご存じだと思いますが、サッカーの試合はホームとアウェーで行われます。サポーターが動くことが地域活性化につながります。スポーツツーリズムという言葉もあるように、観客が動いて他の都市を訪れる。そんなところも含めていろんな取り組みが始まりました。神戸はヴィッセルのホームタウンですので早速仲間に入れていただきました。

ヴィッセル神戸とも話をしてイベントを開催します。最初に行ったのが2011年1月。応援展示を図書館でやりました。サッカーの発祥地である神戸の図書館なんですが、その当時、ヴィッセルのイヤーブックさえ揃っていないような有様でした。何とかヴィッセルの協力を得て、展示資料も集めて、図書館のエントランスのケースで展示をしました。当時所属していた大久保嘉人選手がワールドカップの時に着用したユニフォームとシューズがなぜか神戸市の副市長の部屋にあり、それを急遽お借りして展示して、かつつけたというところです。



ご記憶の方も多いと思いますが、2011年1月は残留争いをしている時です。J2に落ちるかもしれないということで、ポストイットの応援メッセージコーナーには、市民の方から「がんばれヴィッセル」みたいなことを書いて貼ってくれたことがありました。有線放送のJCOMさん、ケーブルテレビの取材も受け、神戸の図書館でこの展示をしたことが功を奏したのか、この年は奇跡の残留を果たしてJ1に残れたというところです。

次の写真は2013年のシーズンです。J2にいた時ですが、その時に、ホームタウンに温泉があるクラブと地元図書館同士のつながりで、「バトルオブスパ」、温泉の戦いみたいな形で催しをしました。具体的には、神戸は有馬温泉と神戸市立図書館、愛媛は道後温泉と愛媛県立図書館、あとは長野県草津温泉と草津町立図書館と山形県かみのやま温泉と上山市立図書館です。

その勝負ですが、たまたまJ2にいたヴィッセル神戸が勝ち点の取り合いをして優勝し、小川慶治朗選手が最多得点を取ったんですけど、図書館有志で用意した盾を贈らせていただきました。

そんな形で図書館とヴィッセルとの連携が始まったちょうどその頃、2011年10月に、賀川さんの方から神戸市サッカー協会を通じて、賀川さんが持つてらっしゃるサッカー関連の資料の展示場所を提供してほしいという依頼を受けました。

神戸市はいろんなところを考えたんです。区民センターや生涯学習センターなど、いろいろ考えました。やはり置き場と管理する人、入館料を取るのかどうかなど、いろんなことがあってなかなか決まらなかったんです。

ちょうどその話を受けたのは、神戸市教育委員会のスポーツ体育課というところなんですが、「図書館でヴィッセルと連携してるで」という話が耳に入り、図書館で受けたということです。私としては、全国の図書館仲間で、図書館でもサッカー図書コーナーを新たに作ったところ多かったんですが、この資料をいただけたら仲間うちではトップを取れるという意識がありました。

2002年のワールドカップの時、神戸でも試合をやったんですが、当時の三木館長が日本サッカー協会に出向してたんです。神戸市の職員でありながら出向して、ワールドカップに関連する仕事もして

神戸市立中央図書館について

開設：明治44年（政令指定都市では最初の図書館）
大正10年に大倉山（現在地）に移転
蔵書数：約102万冊
入館者：約45万人



サッカー関連資料受託の経緯

2011年10月に、神戸市は賀川氏から神戸市サッカー協会を通して、所蔵するサッカー関連資料の展示場所提供の要請を受け、いくつかの施設の使用を検討したが、様々な課題があることから適切な場所が決まらなかった。その後2013年度になり、市のスポーツ体育課からの打診を受けた神戸市立図書館は、内部で検討した結果、「特別コレクション」のひとつとして受入れの方針を固めた。受入れ時期については、中央図書館1号館は耐震化工事が予定されていたため、工事終了後の2014年春とした。



芦屋のご自宅からサッカー
関連資料を図書館に
搬入したあとでの記念撮影

神戸賀川サッカー文庫開設

「サッカー図書室」の開設告知

開設セレモニー



開設記念講演会



「サッカーリビング」の開設セレモニー

開設セレモニー

開設記念講演会

いたということで。図書館内で検討し、これは私と館長が二人で話して決めたことですけど、すんなりOKが出て、賀川さんの資料を神戸の図書館で預かることにしました。教育長には私から説明しましたが、教育長は堺市がJFAとの関係やセレッソのホームタウンになるとかでこの資料を欲しがるかもしれないという噂も流れていて、絶対そっちに取られたらあかんということも言われました。

ちょうど図書館の耐震工事があったので、図書館にサッカー文庫を開設するのは2014年の春にしました。ちょうどまたワールドカップの年になったわけです。

いよいよ資料を預かって、開設セレモニーをします。関西のサッカー界の重鎮がたくさん集まり、また蘭の花が届いて祝電が入り、私にしてはものすごく忙しかった印象です。ここで言うたらあれですけども、挨拶されるサッカー関係の方、皆さん声が大きいんです。セレモニーをやってると、図書館の別のところから「うるさい」みたいな声が来ることがありましたので、それを抑えるのに職員を回したり、結構大変でした。セレモニーが終わって初の講演会を、「神戸とサッカー」について賀川さんにお話していただきました。これはサロン2002と共にやらせていただきました。

話の内容に、横浜と神戸のどっちが先やねんっていう話がありました、神戸市の図書館に「兵庫ニュース (THE HIOGO NEWS)」という居留地の新聞があるんですが、そこで、何月何日の何時からサッカーの試合があるという記事があります。横浜で最初の試合が行われたよりも少し早めにやっているということで、神戸が一番と言えるのですが、賀川さんがおっしゃるには、「神戸はあんまりそんなところで出しやばらへんから、横浜でええんちゃうか」ということでした。

◆神戸市立中央図書館と賀川サッカー文庫

賀川サッカー文庫の開設行なったのは2014年で、ワールドカップの年です。セルジオ越後さんと本多さんが、賀川さんと一緒にブラジルに行かれています。始まる前の5月31日に講演会、帰ってきてからの8月2日に報告会を企画しました。日本代表は残念な結果でしたが、残念ということについても賀川さんの視点で解説されました。

2014年は、1964年の東京オリンピックから50年に当たる年でした。サッカー文庫の仕事は図書館業務として関わっていますが、私にもサッカー文庫以外にいろいろ他の仕事があります。そんな中、賀川さんからしょっちゅう電話がかかってきます。「今年は東京オリンピック50年やから、神戸新聞にいた力武さんとオリンピックについて話したいんやけど、セッティングしてくれるか」という内容でした。お断りすることはできないので、早速、力武敏昌さんに連絡を取って承諾していただき、対談形式のトークイベントの形でさせていただきました。

賀川さんは図書館以外のところでという要望があり、ノエビアスタジアムの会議室を借りて、サッカー場でオリンピックの話をしました。賀川さんはサッカーで力武さんは陸上競技がご専門です。より早く、より高く、より強くという、サッカーとは少し視点が違うなという話をされたことが印象に残っています。

これは私だけかもしれませんけど、料理研究家の土井勝さんが、陸上の短距離走の選手候補だったという話もこの講演会で初めて聞きました。賀川さんは何でも知ってるなと。土井勝さんは船のコックさんだったんです。揺れてる船の中で包丁を使って料理するのに足腰が大事だという話も聞いたことがあります。



そうこうしているうちに、いよいよ FIFA 会長賞のニュースが図書館にも入ってきます。12月です。

FIFA からメールがあったという話を受けました。仲間うちでお祝いの会をしたんですが、ブラジルのワールドカップの頃から、私のところにも「賀川さんに取材したいけどどうすればいいですか」という電話がかかるようになり、本多さんに相談したらこちらに回してくださいということで、取り次ぎもしていました。

「シューイチ」っていうテレビ番組に出られたりするなど、FIFA 会長賞をいただいてからたいへん忙しかった記憶があります。

ちょっと遅れましたが3月に講演会を、賀川さんの希望で「フットボールクロニクル」という題でしていただきました。今日も前に並べていますが、トロフィーとメダルをお借りして図書館のエントランスに飾させていただきました。

翌年の2015年には、カナダで女子のワールドカップがありました。アメリカが優勝して日本は準優勝でした。NHKの神戸放送局に田代アナウンサーというキャスターがいます。神戸市民なら誰でも知ってるキャスターが女子サッカーに興味・関心があるということで、賀川さんを訪ねていろんなことをお話しでした。その時賀川さんから「じゃあ対談形式でイベントにしたらどうや」ということで田代さんにお願いしました。NHKの肩書きでは出られないで、プライベートで出ていただきました。

講演会としては最後になりましたが、先ほどから何度も名前が出てるクラマーさんの話です。クラマーさんが亡くなったときに、東京のサッカーミュージアムで「デットマール・クラマーと日独サッカー交流展」が開かれました。「あれ神戸でもできへんか」ということで、日本サッカー協会と神戸市立中央図書館

の共催で、「@神戸」をつけてやりました。ここでクラマーさんの遺品とか、サッカーミュージアムで展示していたものをお借りするんです。非常に大事なもので扱いに注意してほしいということで、JFAの津内さんという女性が担当されて、みんな津内さんが白い手袋をして並べられました。展示ケースの中に蛍光灯があるんですけど、書簡とか、蛍光灯を当てたら文字が消えることがあるらしいので、蛍光灯もつけないでしてほしいと言われました。



それから、神戸に日独協会があります。そこでも展示会と講演会をやりたいと話を持っていったら、広報の方がいろいろ協力してくださり、講演会には日独協会の会長ご夫妻が来場されるというありがたい話もありました。

◆賀川サッカーサロンのこと

賀川サッカーサロンについてです。2015年10月から毎月1回、サッカーの話をいろんな方としたいということで始まりました。今日の配付資料にもあります
が、計41回のサッカーサロンを開催しました。賀川さんは、時には立ち上がってホワイトボードに絵を描いて説明したり、足でこんな風に蹴るんやと、ボールを蹴る格好をしていただいたり、非常に楽しい会でした。

今日は大澤さんが来られますけど、サンケイスポーツにも特集で書いていたり、デイリースポーツでも記事にしてもらいました。

第41回目、最後はヴィッセル神戸の天皇杯優勝についてでした。賀川さんはずっと、ヴィッセルが弱いというか、運がなかつたことをいつも気にされていて、「神戸のサッカー界でちょっと誤算やったのはヴィッセルが弱いことやな」っておっしゃってたんですけど、いまはJリーグ2連覇、天皇杯も取るようなチ

ームになっているので、賀川さんもホッとしておられるのではないかでしょうか。

これが初めてタイトルを取った、天皇杯優勝のときですね。



賀川サッカーサロン開催記録

回	日 程	サロンのテーマ
第1回	H27.10.31	サッカー全般について、ポジショニングについて
第2回	H27.11.21	ワールドカップ2次予選について、クラマー氏「追悼の会」に出席されたこと
第3回	H27.12.9	クラブワールドカップについて、澤穂希選手の引退について
第4回	H28.1.30	AFC U-23選手権（オリンピック最終予選）について
第5回	H28.2.20	『ベルリンの奇跡』（図書）について
第6回	H28.3.26	岡崎慎二選手の活躍について
第7回	H28.5.28	レスター優勝について
第8回	H28.6.25	EURO2016について
第9回	H28.7.30	EURO2016について
第10回	H28.8.27	今年のサッカー殿堂入り発表について
第11回	H28.9.24	U-16 対オーストラリア戦について
第12回	H28.10.22	ワールドカップアジア最終予選について
第13回	H28.11.26	第1回アジア大会サッカー競技について
第14回	H28.12.24	クラブワールドカップ決勝戦について
第15回	H29.1.28	天皇杯決勝戦、高校サッカー（男女決勝戦）、ワールドカップ出場枠拡大について
第16回	H29.2.25	故 岡野俊一郎氏（元日本サッカー協会会長）について
第17回	H29.3.25	ワールドカップ最終予選 対 UAE 戰について
第18回	H29.4.22	なでしこジャパンのキリンチャレンジカップ勝利について
第19回	H29.5.27	『このくにのサッカー 賀川浩対談集』発行について
第20回	H29.6.24	ワールドカップアジア最終予選 対イラク戦について
第21回	H29.7.29	Jリーグワールドチャレンジ2017とポドルスキーヴィッセル神戸加入
第22回	H29.8.26	ACL (AFCチャンピオンズリーグ)について
第23回	H29.9.30	ロシアへの道（ワールドカップ出場決定までの日本代表の戦いを振り返る）
第24回	H29.10.28	キリンチャレンジカップ2試合（対ニュージーランド戦、対ハイチ戦）の課題
第25回	H29.11.25	国際親善試合（対ブラジル戦、対ペルギー戦）について
第26回	H29.12.16	E1 フットボールチャンピオンシップ2017 決勝大会について、天皇杯について
第27回	H30.1.27	ワールドカップロシア大会に向けて（ハリルJグループリーグ突破の条件）
第28回	H30.2.24	平昌（ピョンチャン）冬季オリンピックについて、今年のJリーグについて
第29回	H30.3.24	ノエビアスタジアムの改修について
第30回	H30.5.26	ワールドカップロシア大会 日本代表への期待、イニエスタのヴィッセル神戸加入
第31回	H30.6.30	2018FIFAワールドカップロシア大会 日本代表の戦い
第32回	H30.7.28	2018FIFAワールドカップロシア大会の総括
第33回	H30.8.25	Jリーグの外国籍選手
第34回	H30.9.22	ワールドカップ後に若返った日本代表と森保新監督について
第35回	H30.10.27	新しい日本代表の活躍（キリンチャレンジカップ3試合を振り返って）
第36回	H30.11.24	鹿島アントラーズのACL優勝
第37回	H31.1.26	AFCアジアカップ UAE2019について（日本代表が準決勝に進出）
第38回	H31.2.23	AFCアジアカップ UAE2019について（カタールの優勝）
第39回	H31.3.23	開設から もうすぐ5年（サッカー文庫のこれまでと、これから...）
第40回	R1.8.10	〔話の肖像画〕現役最年長サッカーライター・賀川浩
第41回	R2.1.18	ヴィッセル神戸の天皇杯優勝を祝う

◆賀川さんの伝えたかったこと

賀川さんの伝えたかったこと。図書館へということですが、賀川さんは「1995年の阪神大震災で資料室兼仕事場が倒壊し、（資料が挟まって潰れてしまったということなんです。）図書・資料に囲まれて仲間とサッカーを語り合う場を持ちたいという望みが潰えて20年、2014年の90歳になろうという年の春に、サッカー人生の新しい局面が開けるとは、誠にありがたいこと」とサッカー文庫開設時の挨拶文に書かれています。図書とか資料を目の前に置いて、いろんなサッカーの話を仲間とできるところを長いこと望んでおられたのです。

だから図書館は、本当に誰でも使えて無料

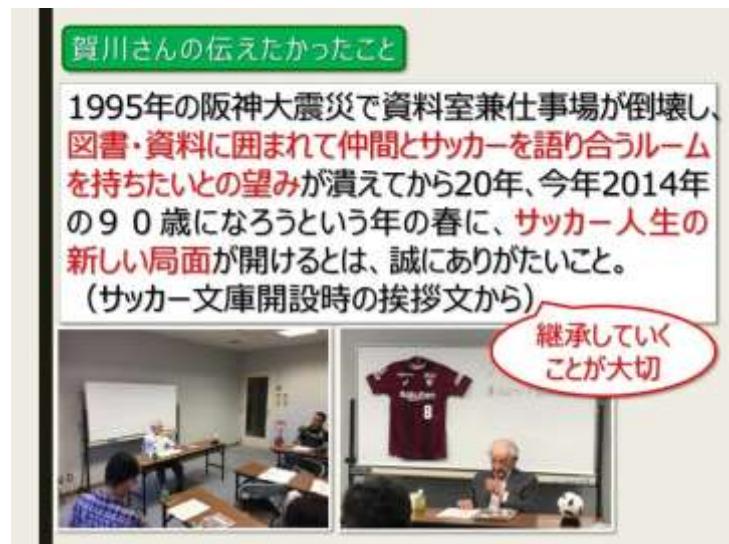
で入れるところで、もちろん本があるところです。その中でこういった仲間とサッカーを語れる場を賀川さんに提供できたのは、図書館としてやってよかったなと思うところです。

図書館ということで言いますと、神戸市の図書館ではないですが京都府立京都学・歴彩館というのがあります。図書館と同じような施設で、そこに保存新聞のコーナーがあるんです。夕刊京都の昭和26年の記事ですが。賀川さんが初めてサッカーの記事を書いたのが、産経新聞に入社する1年前のこの記事です。賀川さんは「頼まれて書いたんやけどな」と言って、私はネットでいろいろ探したんですけど結局記事の内容は出てこなかったんです。それが、夕刊京都を所蔵している図書館を調べたら京都府立京都学・歴彩館しかなく、複写サービスを受けて帰ってきたのがこれです。懇親会の時にでも読んでいただけたらと思います。

図書館というのはこういったことができるんですね。だから、賀川さんの書かれたものも神戸の図書館としてこれからずっと残していくかなければいけません。

あともう一つは、賀川さんが亡くなられたことは本当に残念なんですが、賀川さんの残していただいた、本を前にしてサッカーのことを語り合う場をこれからも提供していくことが、図書館にとっても大事かなと考えます。

今日のシンポジウムには、いま神戸の中央図書館からもオンラインで参加しています。それからサッカーサロンに何度も参加された小堀さんが今日、この会場にいらっしゃいますので、ひと言コメントをいただけたらありがとうございます。



小堀(徹)：ご指名いただきました小堀です。ずっとサッカーサロンに行っていたわけではなくて、60歳の定年まで17回も転勤して、海外も含めいろんなところに行って、このサロン2002にも行ければ

いいなってずっと思っていてもなかなか参加できなかったというのがございます。賀川さんは、親父がほぼ同年代です。昔からサッカーマガジンとかで賀川さんの記事を拝見させていただいていました。35歳の頃だったと思いますが、亡くなられた平田生雄さんという方にご紹介いただき、会合に寄せていただいた時に初めてお目見えさせていただいたのが記憶に残っています。退職して大阪暮らしになったので、神戸のサッカーサロンに参加させていただきました。10回ぐらいしか参加はできなかったと思いますが、貴重な話を聞ける場だったなあと。賀川さんからはサッカーいろいろなことを学べることに気づかせていただけたことに本当に感謝しています。

伝えたかったことっていうか、本を前にして仲間と語り合える場というのは、これからも特に図書館として残していくこうというふうに考えています。私も70歳を超えた元職員という立場ですが、こういったことにまた関わっていきたいと考えております。

もう1年経ちますけども、1年前に、現場の職員が賀川さんの訃報に接した後、サッカーライブラリーアークの入口に追悼コーナー、記帳台を設けて、コメントと名前を書くところを用意してくれました。

最後ですけれども、サッカーライブラリーアークの中には賀川さんの特別なデスクがあって、椅子に上着をちょっとかけてますけど、この椅子も元々名譽館長がいた時があって、館長より立派な椅子が倉庫の中に眠ってたのを引っ張り出してきました。賀川さんが来られるので使っていただいてたんです。この写真を撮ったのは、サッカーライブラリーアークに私と賀川さんと二人でずっといた時です。非常に贅沢な時間やなあと思っています。サッカーサロンのテーマを決めるのも、私はとても楽しかったです。毎月1回、必ず賀川さんのところを訪れて「テーマ何にします？ どんな資料を用意します？」という話をして。やっぱり長いんです。1時間半以上はかかるてしまうんですが、賀川さんが直々に紅茶とかコーヒーとかをウェッジウッドのコーヒーカップに入れてくださり、本当に楽しい思い出でした。

私からは以上です。どうもありがとうございます。



6. 出嶋剛一最期の取材

本多：賀川さんの晩年というか、お亡くなりになるまでの数年間、僕がずっと取材の受付をさせていただきましたが、取材を受けるというよりはずっと断る役割になっていました。賀川さんは語学について、記者の素養としてお話ししていましたけれど、もう一つ賀川さんがおっしゃっていたのが、「記者はやっぱり厚かましないといかん」ということです。

最後に、厚かましく、賀川さんを取材していただきました、共同通信の出嶋さんです。

◆賀川さんへの最後の取材－感謝の意を伝える場

皆さんお疲れのことだと思いますが、ご紹介をいただきました、共同通信でいまはサッカー担当のデスクをしております出嶋と申します。このような機会をいただきありがとうございます。

恐らく、オンラインで参加されている方も含めて、賀川さんと面識がないというか、お話をされたことがない方は、私以外はいらっしゃらないんじゃないかなと思います。というのは、私は今回こういう形で呼んでいただいた理由になるんですけども、実はデスクになる直前の2年間、大阪に転勤しておりました。転勤する直前には、これは記者としての最後の期間で、東京に帰ってきたらデスクだという通告を受けての転勤でした。

大阪の2年間は現場の記者としての仕事があったんですけど、どうしても賀川さんの取材をして、賀川さんが100歳の誕生日をお迎えになる時に、共同通信として、こういうサッカー記者がいた、こういうジャーナリストがいたということを残せるような記事を記者としての最後の仕事として書きたいと思いました。それで本多さんにずっとご連絡をしていた次第でした。

何度かタイミングがあったのですが、本多さんに労をとっている間に賀川さんの体調の変化があつたりして、何度かリスケジュールになりました。東京に戻る時期が迫り、数日後に東京に戻るための引っ越しが決まってるようなタイミングで、ようやくお会いすることができました。その時は本多さんから、「おそらく話していただくこと、取材をしていただくことはかないません。どうしますか？」というような話でしたが、このあたりが僕は厚かましいと言われるのかもしれません、「それでしたら感謝の意をお伝えしたい」と。私も20年ぐらいサッカー記者をずっとやらせていただきました。いまそのまま「サッカー記者」という言葉が出てきたのですが、おそらくこう名乗れるようになったのは賀川さんがいらしたからだと思うんです。牛木さんもそうかもしれません。

私は実は共同通信に入る前にスポーツ紙にいました。大澤先輩もおっしゃってましたけれども、スポーツ紙にいて特に感じたのは、この国においてナンバー1スポーツは野球だなということです。野球を中心としたスポーツの取材が回っている中で、昔はよりサッカー取材をしていくのは結構大変な時期だったというのが、先輩方のお話を聞いてわかりました。大澤さんや稻垣さんのお話にもありましたけど、賀川さんはサッカーを取材をするための道を切り開いていらっしゃったんだなと思いました。プロの新聞人と言いますか、阪神で産経新聞、サンケイスポーツが食っていくんだという道筋をつけられるのはプロの新聞人の仕事だと思うんですけど、その一方で、自分はサッカー取材をしたい、会社に損はさせへんと言いながら、やりたいこと、やらないといけないことを力強く両立させていく。そういう方がいらっしゃったから、サッカーの取材も認められるようになったのだと思います。ご自分で切り開いていくという力強い先輩、大先輩だったと思います。その方がいらっしゃるから、自分も現役のサッカー記者と名乗れたんだなと思いました。



最後の仕事として、取材ではなくて、賀川さんに直接「ありがとうございました」とご挨拶だけでもできたらと。本当にそういう気持ちだけで賀川さんにお会いしました。本多さんも一緒にいてくださいました。私も、お目にかかれただけでもいいと思ったんですけど、本多さんから「言葉をかけてください」と言ってくださいました。その時は、本当にいまお話ししたようなことです。「賀川さんがいらっしゃったので、賀川さんたち大先輩のおかげで、私自身ちゃんと仕事をすることができました。これからは賀川さんの思いをつないでいきたいと思います」というようなご挨拶をさせていただいたのを覚えています。

実は「厚かましい」という言葉はですね、記者にとっては本当に最高の褒め言葉であります。ご紹介いただいた時も、本来の厚かましいというのは記者にとっては嬉しい言葉ですけど、やっぱりその直後にお亡くなりになられた時には、このことにすごくショックを受けまして、私が無理をお願いしたからそういうことになってしまったんじゃないかなというような。私もショックを受けまして。

おそらく最期に会った記者が私であるということを言うのは実は今日が初めてなんです。それまでは言えませんでした。本多さんにもショックですというようなことをお話したのを覚えています。

少しだけ救われたのがお葬式の時です。告別式の時かな。親族の方が、賀川さんの昔のお話、お姿として、電話帳をめくって「賀川」という名字がついている人のところに片っ端から電話して、自分の「賀川」という名字の由来を探るような作業をされていたという話をされました。ときには急に訪ねてピンポンと押して取材みたいなことをする。そういうエピソードをお話になられて、知りたいことであったり自分が興味を持ったことに対する探究心、そういうものを突き詰めていく、正直に向かっていく人でしたというエピソードをお話されたのを聞いて、少し救われました。私も記者の一人で、そういう新聞人の一人であるという思いを持っておりましたので、今回の賀川さんの件では良くない方向に出てしまったのかと思った時期もありましたけど、少しずつ、いや頑張れよと言ってくださっているんじゃないかなと思えるようになってきました。

◆次世代につなげるために

私は次のワールドカップはデスクとして迎えます。W杯を取材する記者を指導する立場になります。どういう役目を担うのか。どういう覚悟を持っていかないといけないか。そういう意味では、やっぱり賀川さんが為されたようなことを後輩たちに伝え、またそういうのを記事として残していくお手伝いをするということが、最後にお目通りをさせていただいた人間としての役目かなと思っております。

これから新聞という媒体がどうなっていくかわかりませんが、現場に足を運んだ記者が見聞きしたものを持ち残していくという作業は変わらないと思います。賀川さんが残されたアーカイブを何度も拝見しました。私が現場の記者だったときに、例えばワールドカップでドイツで対戦するとなると、ドイツと日本との縁ということで調べていく中で、クラマーさんに行き着き、クラマーさんってどういう人かを調べていくと、そこには賀川さんの書かれたものがあります。日本サッカー協会



100 周年の節目でいろいろ調べても、やはりそこには賀川さんの姿がある。賀川さんが書かれたものがアーカイブとして残していただいているのは本当にありがたいことです。自分たちが数十年後、あるいは何年後かの後輩たちに残していく、何か参考になるもの。日本がどう戦っているか、世界のサッカーがどう変わっていくか。そういうものを残していく人間の一人であるという志を、賀川さんから教えていただいたと思います。そういうものをまた次の世代に伝えていく一人として、これからも仕事をしていければいいなと思っています。

責任感を持って頑張っていきます、ということを伝え、最後のお話とさせていただきます。
ありがとうございました。

III. クロージング

中塚：こちらでお願いしていた 6 名の方から、いろんな角度から「賀川さんを語ろう！」の話をお聞きしていたら、もう東京は暗くなってきました。夕方 5 時です。神戸はまだ明るいですかね。30 分ぐらい時差があるでしょうか。本当でしたらオンラインでご参加の方も含め、いろんな方からコメントをいただきたいところですが、時間が限られています。

最後に賀川さんからのメッセージです。去年の賀川サッカー文庫 10 周年の時に会場で流してもらったものですが、それを視聴してお開きにしたいと思います。

世界でね、こんだけみんながやって、こんだけ喜んで、やって、世界の大会でもこれだけみんなが熱入れてやる。こんな競技はどこにもないわけやから。

せつかくこういうもんを、日本でもやってるんだから、やっぱり日本でやってる以上、日本のサッカーの皆さんのがレベルを上げて、世界の上の方のレベルのサッカーをね、いつも見られるようにすれば、楽しいわね。

そういうことで、サッカーは、やっぱりレベルアップというのが非常に大事やと思うんです。
まあおもしろい遊びやからね。誰もこの遊びをおもしろいとは言われへん。

おもしろい遊びですから。

みんなでやって、みんなで楽しんで、みんなで、いろんな進歩を味わえるわけやから。

そういう意味では、サッカーいうのは、やっていても、見ても、聞いても、話しても、おもしろい遊びや。

まあまあこれからも。

せつかくここまでできてんねんから、このサッカーをもっとさかんにすれば、日本にとっても、日本の国民にとっても楽しみになる。

手をゆるめない。

日本サッカー協会は、ずっと学校の先生方をはじめとして、教育の中でも、何でも、それぞれのポジションの人が一生懸命やってきました。

一生懸命やってきた、手抜きはしない、今後もね。

今までやってきたことを手抜きしないで続けるということが、やっぱり最大の進歩になるやろね。

こんなに短い時間の間に強くなつた国もないし、こんなに短い時間で技術の進化した国もないわけです。やっぱり、この進歩のあとを止めないように、ずっと日本のサッカーを強くし、おもしろくしていくということが大事やと思います。

中塚：去年の9月に、本多さんと私で賀川さんのところを訪ねた時に、賀川さんが語ってくださった言葉です。私にとっては最後にお聞きした賀川さんの肉声です。そして多くの方にとって、最後のメッセージとして心に残るものとなったのではと思います。

改めまして賀川さんのご冥福をお祈りするとともに、賀川さんから何かを受け継ぎ、次につなげていくことを誓い、このシンポジウムを閉じさせていただきます。

長時間にわたり、会場の皆さん、オンラインの皆さん、どうもありがとうございました。

IV. 参加者からのコメント

◆山内 博之 12月24日

登壇者だけでなく、会場で話を聞く我々の間にも、賀川さんに対する敬愛の念が共通してある、とても温かい会でした。

登壇者のお話で賀川さんの功績を、知らなかつたことも含めてあらためて振り返ることができるとともに、多くの人に敬愛される賀川さんのお人柄を偲ぶことができました。

賀川さんのことをまったく知らない若い人が興味を感じてくれたことも嬉しかったです。

◆長岡 康規 12月24日

シンポジウムのあの懇親会では、すべての参加者がマイクを手にして話をすることができました。一人ひとりを紹介し、話をする機会をつくろうという中塚さんに感心しました。

2002 サロンがずっと続いているわけが少し分かったように思います。

◆高平 豊明 1月8日

- ・名前だけサロンファミリーメンバーで、何の役にも立たない立場で、こういうシンポジウムを聞かせていただき、なんと贅沢な話なことかと感謝申し上げます。登壇者の方の多彩なことも「サロン2002」ならではと感服しております。
- ・今回、神戸市立中央図書館にいらっしゃった松永様が登壇され、神戸賀川サッカー文庫で活動されている皆さまがオンライン参加されたのを大変嬉しく拝聴・拝見しました。以前、押しかけさせていただいた節は、大変お世話になりましたと、この場をお借りして御礼申し上げます。
- ・登壇された田村修一様といえば、トルシエ監督、オシム監督などについての著作を拝読させていただき感服申しあげていた方ですので、お会いできる機会があれば、いろいろお聞きしたいことが山ほどある方ですが、見ず知らずの者からの話ではかえって迷惑なこととお察ししております。
- ・最後に、それぞれの登壇者の方から、さまざまご教示をいただき、ありがとうございました。あらためて御礼申し上げます

◆武藤 文雄 1月16日

賀川さんと関係の深かった方々、中塚さん、本多さんを含めて8名の方々が、思い出を語ってくださると言う贅沢なシンポジウムでした。

登壇者の1人、サンケイスポーツの大澤さんが、賀川さんは以下4つの側面があるとおっしゃっていました。①サッカー選手、②サンケイスポーツの記者、③サッカーライター、④神戸FC創設者。これは非常に示唆に富む指摘だと思いました。

このうち、①ですが、私たち後輩は直接見る機会がなかったのでどうしようもありません。賀川さ

んの同世代の名手の方々については、川本泰三さん、二宮洋一さん、兄上の賀川太郎さん、鶴田正憲さんなどについて、賀川さんが書き残してくださったテキストが多数あります。もっとも川本さんは、賀川さんの作品の他に、「俺様が」と言うステキなテキストが多数ありますが（笑）。そのため、映像を見なくとも、往年の名手たちのプレイにイメージをふくらませることができます。賀川さんはご自身のプレイ振りについては、あまり書き残して下さいませんでした。③については、若い頃から多くの賀川さんの文章に触れてきたわけで、直接薰陶を受ける機会もあったので、ある程度の知見がありました。それに加えて、この日の講演者の方々がさらにそれをふくらませる多くのエピソードを語ってくださいました。そう言った中で、今回私が新鮮に感じることができたのは、②と④について、上記の大澤さんと、神戸高校サッカーチームのOBであり、長年教諭を務めながらサッカーチームだった長岡さんが語ってくださったエピソードです。

まず②のサンスポについて。大澤さんが紹介してくださった、賀川さんのサンスポ編集長時代の阪神タイガースへの取り組みが絶品でした。賀川さん曰く、「阪神タイガースだけが大阪と神戸というとんでもなく大きい街を勝手に社名に入れてダブルフランチャイズにしている」と言うことで、賀川編集長が、新聞の地域密着を徹底して行い「阪神、阪神、阪神」、これでサンスポはシェアをずっと上げ1位になったとのこと。私たちサッカー屋が、丹念に築き上げてきたJリーグの理念を、賀川さんは野球と言う場を使い先行されていたわけです。

さらに大澤さんが紹介してくれた④のエピソードもすばらしかった。神戸FCを立ち上げた目的として、「日本のサッカーが強くなるためには、子どもがうまくならなかんわな」とおっしゃっていたとのこと。若い方々は信じられないかもしれません、私たち60代の多くは中学や高校からサッカーを始めたわけです。それではボール扱いが上手な選手の育成は難しい。小学生からボールを蹴る環境を作り普及を図ると言う、今では当たり前の理屈を実践に結びつけられたわけです。

実務者としての賀川さんについては、神戸高校サッカーチームOBで長年同部の部長を務められた長岡さんが語ってくださいました。OB会の運営、古い資料の活用、校正の手腕など。また、1985年に行なった神戸高校の創立記念日の講演において、テープレコーダーから『うわあ』『ああっ』と言った1970年W杯のスタジアムの叫び、どよめきを流されたとのこと。その上で「この時（ペレを軸に世界一になった）ブラジルの人は、ここに来たのは叫ぶためだ」と語られたそうです。正に、サッカーの最大の魅力である感情の発露を、音声を通じて説明されたわけです。

サッカーの魅力が感情の発露であることをわかりやすく語り、強化のためには幼少時代からの普及が重要と実践し、さらに地域密着を推進する。賀川さんの指導の下、私たちは、とうとうブラジルやドイツに勝つのが当たり前の環境を入手できたのだと、再認識できました。

「こんなに短い時間の間に強くなった国もないし、こんなに短い時間で技術の進化した国もないわけです。やっぱり、この進歩のあとを止めないように、ずっと日本のサッカーを強くし、おもしろくしていくということが大事やと思います」中塚さんが流してくれた賀川さんの最後のメッセージ。改めて、賀川さんの薰陶を受け、同時代を過ごせた幸運を噛み締めました。そして、もっともっとサッカーを楽しんでいくことが、賀川さんへの恩返しとなるのだ、と実感させていただきました。

◆小堀 俊一 1月 17日

公開シンポジウム当日、会場で申し述べましたが、切手を通してサッカーを、50年以上楽しみ続けて参りました。この個人的な趣味を賀川さまにご紹介する機会を得ましたことを、とても光栄に存じております。

そして、新しい年をむかえるにあたり、これまでの収集品をもとに、「ワールドカップ100年への途」としてまとめ上げ、賀川さまへのお礼に伝えさせていただきたいと思います。

写真説明：賀川様にサッカ一切手を紹介するきっかけとなった 1 枚です。1998 年、フランスワールドカップ初出場を果たしたのを機会にスカイパーフェクト TV で放映された、「ワールドカップためだけの 500 時間」の打ち上げの時（1998 年 8 月 28 日）のものです。

写真提供は金子勝彦アナウンサー。



◆阿部 博一 1月 18 日

極私的な思い出ばかりを書かせていただきますが、自分の父親と同じ大正 10 年代（1920 年代）前半生まれの賀川さんとのご縁を繋いでくれたのは「サロン 2002」でした。

初めて賀川さんとお会いして言葉を交わしたのは、2002 年 8 月神戸ファッショング美術館で開催されたサロン 2002 「ワールドカップ総括シンポジウム」の懇親会会場でのことでした。クラマーさんとメキシコ五輪全日本チームとのあるエピソードに思わず快哉を上げてしまいました。

次にお会いしたのは、2007 年 2 月に神戸ユーハイムホールで開催された関西サロン「西ドイツからドイツまでワールドカップの旅」でした。後日、ラッセホールでの懇親会と一緒に撮った写真と、翌日兵庫県立美術館で購入した絵葉書（神戸出身の小磯良平がフットボール選手を描いた「彼の休息」）を添えて、賀川さんに手紙を送りました。するとその手紙に関連した投稿を、ブログ「賀川浩の片言隻句」に載せていただきました。笑顔の賀川さん、牛木素吉郎さんと一緒に写る自分の姿が、今となってはとても懐かしくちょっと誇らしいです。ちなみに、ブログ上の「ロベルト・アベリーノ」とは私のハンドルネームです。

「小磯良平画家とサッカー（原文は「crospo」という SNS で掲載された）」

http://kagawa.footballjapan.jp/2007/02/post_6aba.html

また、2009 年 11 月に神戸レガッタアンドアスレチッククラブ（KR&AC）で開催された関西サロン「記者として、サッカ一人として 大谷四郎」にも参加しました。この時は、翌々日に芦屋川の賀川さんの自宅マンションまで遊びに伺わせていただきました。小一時間ほどでしたが、興味深くて面白いお話をいろいろと聞かせていただきました。

「サロン 2002」のイベントではありませんが、2006 年ワールドカップドイツ大会では、Round of 16 「イタリア対オーストラリア」戦後のカイザースラウテルン中央駅のホームに一人でいらっしゃった賀川さんと遭遇し、短時間でしたが日本代表に関する感想などをお聞きしました。

その後も、「サロン 2002」月例会や「日本サッカー史研究会」、「国際サッカー連盟（FIFA）会長賞受賞祝賀会」などの各種イベントで何度かお会いする機会がありました。今回賀川さんと深く関わってこられて関係者の方々の貴重で興味深いお話を数多く聞くことができ、改めて自分のような市井のサッカー愛好家にもやさしく接してくれた賀川さんことを偲ぶ機会をつくってくださった「サロン 2002」に感謝いたします。

◆嶋崎 雅規 1月 19 日

昨年（2025 年）3 月、念願だった「神戸賀川サッカーライブラリー」を訪れました。

そこに、賀川さんはもういらっしゃらないはずなのに、何か一緒にお話をしているような、ゆったりと落ち着いた不思議な気持ちになりました。

所狭しと並べられた数々の資料をゆっくりと眺め、その中には私が勤務していた帝京高校のサッカーチームに関する資料もいくつかあり、とても興味深く、時間の経つのを忘れるほどでした。

賀川さん、本当にありがとうございました。また近いうちにお伺いします。それまで。

以上